九州大学経済学部 同窓会報 第74号

九州大学経済学部同窓会
事務局　〒819－0395
福岡市西区元岡744
　九州大学経済学部内
TEL 092-802-5561 FAX 092-802-5560
mail：dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
郵便振替　01750－6－21743

目　次

令和５年度行事予定（総会のご案内）／1
研究院長からのご挨拶　経済学研究院長　大石　桂一／2
事務局長からのご挨拶　同窓会事務局長　大坪　稔／3
支部だより
東京支部　事務局長　大坪　勇二（昭和63年卒）／4
関西支部　檀　豊隆さんを偲んで
関西支部長　小森田憲繁（昭和46年卒）／5
関西支部副支部長　中野　光男（昭和50年卒）／5
関西支部事務局長代理　清丸　泰司（平成２年卒）／6
秋の見学会（令和４年11月19日実施）報告
関西支部理事　凌　雲翔（平成16年卒）／6
福岡支部　福岡支部事務局／8
福岡支部交流ゴルフ会、第71回コンペを開催！
中園　龍也（平成７年卒）／8
同窓会福岡支部とのつながり
森　大輔（平成16年卒）／9
退職記念挨拶
大学人としての58年を越えて
九州大学名誉教授　津守　常弘／11
春風秋霜なお人柄
徳賀　芳弘（昭和53年卒）／13
鉄人津守先生に寄せて　三浦　正（昭和54年卒）／16
繋がり広がる同窓の輪　宮本　義三（平成３年卒）／17
鉄オタ特集
北海道の蒸気機関車と殖民軌道･簡易軌道　清水　一史／19
鉄道技師だった曾祖父の『回顧録』　鷲崎俊太郎／21
鉄道と歌　平野　琢／22
鉄道による環島：台湾　中本　龍市／24
31歳にてJR･私鉄の完乗達成　伊藤　勇人／25
リレー随想
とある「不良」九大生の顛末記　平田　郁人（昭和58年卒）／27
パーソナル トランスフォーメーション（PX）の場としてのQBS
寺本　憲功（令和4年QBS修了）／28
人物往来　～退任
退任にあたって　石田　修／30
九大での教育･研究活動を振り返って　内田　大輔／31
経済学部同窓会 創立50周年記念寄付金／32
同窓会からのお願い／32

令和５年度行事予定（総会のご案内）

令和５年度の各支部総会を下記の通り予定しております。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。

令和５年度　全国・関西支部合同総会

日時　令和５年５月20日（土）15時～
場所　ハートンホテル北梅田
（大阪市北区豊崎３-12-10　TEL(06)6377-0810）
〈お問い合わせ先〉　関西支部事務局　谷村　信彦
TEL（090）6678－6754
E-mail　nobuhikotanimura１@gmail.com

令和５年度　福岡支部総会

日時　令和５年６月６日（火）18時～
場所　ホテルオークラ福岡
（福岡市博多区下川端町３－２　TEL(092)262－1111）
〈お問い合わせ先〉　福岡支部事務局　国生、高木
公益財団法人九州経済調査協会内 TEL(092)721－4900
E-mail　soumu-02@kerc.or.jp

令和５年度　東京支部総会

日時　令和５年７月７日（金）18時～
場所　学士会館　210号室
（東京都千代田区神田錦町３－28 TEL(03)3292－5936）
〈お問い合わせ先〉　東京支部事務局　大坪　勇二
TEL（090）1690－8989
E-mail　otsubo@shigoto-pro.com

令和５年度　広島地区九大法・経同窓会総会

日時　令和５年11月　開催予定
場所　未定

新型コロナウイルス感染拡大防止の為、変更・中止の可能性があります。出席希望の方はホームページでのご確認をお願いします。

研究院長からのご挨拶

経済学研究院長
大石　桂一氏
1990(平成2)年卒
1993(平成5)博士入

このたび、2023年４月から2024年３月までの１年間の任期で経済学研究院長に再任されました。あと１年、どうかよろしくお願いいたします。

2023年４月からの新しい部局執行部のメンバーは、内田交謹教授（副研究院長・再任)、宮崎毅教授（経済工学部門長、経済工学専攻長、経済工学科長)、八木信一教授（国際経済経営部門長、経済システム専攻長、経済・経営学科長)、目代武史教授（産業マネジメント部門長、産業マネジメント専攻長)、與倉豊教授（産業・企業部門長)、および大石の６名です。新執行部一丸となって経済学部･学府･研究院の発展に尽力していく所存です。

新型コロナウイルスは昨年度もまた猛威をふるいました。対面／ハイフレックス授業を基本としながらオンライン授業とのベスト・ミックスを追求する方針でスタートした2022年度でしたが、第７波が本格化した2022年７月には経済学部生の間でもかなり感染が拡大し、そのため夏休み前の２週間は全面オンライン授業に切り替えざるを得ませんでした。その後は一応の収束をみておりますが、経済学部・学府はこの３年間で多くの経験とデータを蓄積しておりますので、それを活かして、今後も引き続きベスト・ミックスを追求し、質の高い教育を提供してまいります。

2018年４月に始動した「経済学部グローバル･ディプロマ・プログラム（GProE)」は、コロナ禍の中でも一昨年度に第１期生４名を、昨年度はさらに多くの７名の修了生を送り出すことができました。２年次進級時に選抜を行い、１ヶ月の海外短期語学研修・半年以上の長期交換留学・外国語での卒業論文などを課すことでグローバル人材の育成を目指すこのプログラムには、各学年およそ10名がプログラム生として在籍しておりますが、新型コロナウイルスの影響で必修の長期交換留学が叶わず、修了を断念した者も少なからずいます。しかし、第２期生を中心とする昨年度の修了生７名は、決して諦めることなく、高い志をもって学び続け、晴れてディプロマを手にして世界に羽ばたいていきました。

彼らの多くは、コロナのために３年次の交換留学の派遣が中止され、４年次にやっと留学が叶った学生たちであり、うち１名は交換留学を実現するために敢えて留年してプログラムを修了した第１期生です。現４年生の第３期生は、短期語学研修がオンライン留学にならざるを得ませんでした。また、現３年生の第４期生は、本来であれば夏休みに実施するはずの短期語学研修がたびたび延期され、２月になってようやくオーストラリアに行くことができました。このように困難な中でも、GProE生たちは果敢にチャレンジし続けています。そうした先輩たちの姿を見て、GProEを志願する１年生は年々増える一方です。今後さらにグローバル人材の育成に力をいれてまいりますので、同窓会の皆様におかれましても、どうかご支援のほどをよろしくお願いいたします。

GProEと同じく2018年４月にスタートした「文系４学部副専攻プログラム」は、今年度から工学部建築学科が新たに参画し、名称も「人社系副専攻プログラム」に変更されることになりました。学生がそれぞれの学部で専門科目を深く学びつつ、他学部の授業を副専攻として体系的に学ぶことで、確固たる専門性と幅広い教養を併せもった人材を育成することを目的とするこのプログラムがさらに拡充されたことを嬉しく思います。2022年度には経済学部から延べ６名の副専攻プログラム修了生を輩出いたしました。これからも、そのような意欲の高い学生を学部として引き続き支援してまいります。

大学院では、数学博士人材を育成する、九州大学の５年間の修士博士一貫プログラムである「マス・フォア・イノベーション卓越大学院プログラム」は昨年度、「マス・フォア・イノベーション連係学府」に改組されました。経済学府経済工学専攻は数理学府およびシステム情報科学府とともに、その重要な一翼を担っております。既存のプログラムとしては、中国人民大学との「ダブルディグリー･プログラム」に加え、すべて英語による授業・論文指導で学位を取得する「公共経済学（IPPE)」、「金融・企業経済学（IPFBE)」、「経営・会計学（IPMA)」の３つの

国際プログラムがすでに十分定着し、世界各地から集まった優秀な大学院生にグローバル・スタンダードの教育を提供し続けております。

社会人教育に関しては、産業マネジメント専攻（九州大学ビジネス・スクール：QBS）、芸術工学府、および九州大学ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター（QREC）３者が連携して教育を行う「デザイン×ビジネス×アントレプレナーシップ専修トラック（DBEX）」が昨年度始動いたしました。さらに、エビデンスに基づいて科学技術イノベーション政策を立案・実行できる高度専門人材の育成を目指す「科学技術イノベーション（STI）政策人材育成プログラム」を昨年度から経済学府が責任部局として実施しております。

九州大学は2021年に指定国立大学法人の指定を受けました。次の大きなステップとして、国際卓越研究大学に九州大学が選ばれることを、石橋達朗総長は目標として掲げておられます。その認定を受けるためには間違いなく大変革が必要となりますが、世界の有力大学に伍して戦える大学になるべく、なお一層、尽力してまいります。

最後に、前号および今号の同窓会報にもお願いの文書を同封させていただきましたが、2024年には経済学部の前身に当たる九州帝国大学法文学部経済学科の創設から100年を迎えることから、このたび人社系４部局協働で法文学部創立100周年記念プロジェクトを立ち上げました。前経済学研究院長の岩田健治教授は昨年10月に九州大学本部の理事･副学長に就任され、本プロジェクトの旗振り役となられております。九州大学基金を通じて集められた寄附は、記念事業のほかに、GProEや副専攻プログラムなど、学生の教育を支援するために活用させていただきます。同窓会の皆様におかれましては、どうか、次代を担う後輩たちのために、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

令和５(2023)年度入学式　新入生328名
令和４(2022)年度卒業式　卒業生307名

同窓会事務局長
大坪　稔氏
1995(平成7)年卒
1997(平成9)年博士入

令和５年４月５日（水）、伊都キャンパスの椎木講堂で令和５（2023）年度入学式が行われた後、14時から初めての経済学部保護者説明会、７日（金）にはイーストゾーン大講義室Ⅱにて経済学部オリエンテーションが開催されました。社会人中心の産業マネジメント専攻の入学式は、４月１日（土）に、伊都キャンパスD105教室で開催されました。入学者総数は328名で、内訳は経済学部経済・経営学科147名、経済工学科93名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻41名、産業マネジメント専攻47名です。経済学部の保護者説明会およびオリエンテーションでは、貫正義同窓会長にお越しいただき、同窓会の説明と入会案内を行っていただきました。

３月20日（月）に、４年ぶりの経済学部卒業生の卒業記念祝賀会を開催いたしました。伊都キャンパスへ移転して以降、天神のホテルで開催していましたが、本年は新型コロナウイルスの感染状況が予測しづらいために大学生協の食堂での開催となりました。

卒業記念祝賀会を盛り上げてくれた岩田ゼミ学生幹事の皆さん

経済学部卒業生は230名で、うち経済・経営学科139名、経済工学科91名でした。経済学府修士課程修了生は77名で、うち経済工学専攻20名、経済システム専攻19名、産業マネジメント専攻38名です。若手研究者への研究支援や学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与が、以下の通り行われました。

修士論文・プロジェクト論文

（１）経済工学専攻　池田　昌平
（２）経済システム専攻　朱　　咏蓮
　　下津浦　大賀
（３）産業マネジメント専攻　鬼崎　美緒
　　伊藤　　潔

学部成績優秀者

（1）経済・経営学科　牛島　大悟
　　浅田　崇嗣
（2）経済工学科　中田　清香

経済学部長賞　経済工学科　伊藤　華奈

昨年度は、新型コロナの影響を受けつつも、各支部の皆様方をはじめ大勢の方々のご協力を仰ぎ、一年間の活動と行事を終えることができました。関係する皆様方には心よりお礼申し上げます。現在、当同窓会では、財政問題の解決と2025年の50周年同窓会記念事業に向けて寄付金を募っています。ぜひとも、ご協力をお願いいたします。また、今後も貫正義会長を先頭に、同窓会活動のさらなる充実・発展を図ってまいりますので、各支部同窓会役員の方々ならびに同窓生の皆様方へ一層のご協力をお願い申し上げ、新年度のあいさつとさせていただきます。

支部だより

東京支部

2022年後半の活動

昨年後半の活動は、とにかく「イベントの数年ぶりのリアル化」に尽きます。コロナ感染防止に留意しつつの活動ではありましたが、待望のリアル開催に理事一同、大いに士気が上がりました。

同窓会活動の新たな気づき

振り返って最も特筆すべきは、２年ぶりに支部総会が「リアル」に開催されたことです。前号でも触れましたが、全力で集客に注力し、ご来賓19名、参加者70名の合計89名での開催でした。参加人数は、ほぼコロナ前の水準に戻りました。

今年の記念講演は、鷲崎俊太郎准教授の「築地から見える都市経済史…江戸・東京の今昔比較」で、大いに盛り上がりました。今回で５年間支部長を務められた秦喜秋支部長が退任され、新しく伊東信一郎さん（昭和49年卒。ANAホールディング前会長）が支部長に就任されるなど、ニュース性も充実しており、二次会も席が足りなくなるほどの盛況で、大変やりがいが感じられた総会となりました。

しかし募集活動は決して楽ではありませんでした。ここで私が気づいたことは、同窓会活動を集客マーケティングと位置付けて、計画と行動に時間を割くことを、本業の仕事並みに「覚悟」して取り組むことです。覚悟というと大袈裟ですが、要は「片手間」意識を捨て去ることだと思います。

於：東京支部総会

前東京支部事務局長の吉元利行副支部長と

新卒歓迎会については、４月15日（土）午後３時から有楽町の東京オフィスとオンライン併用で開催することとし、若手理事を中心に、企画・運営を行うこととしました。

なお、３月の卒業祝賀会には、開催告知のため、竹之下理事、稲波理事と私、大坪事務局長を派遣することがこの時点で決定しています。大いに情報宣伝活動に勤めてまいります。

これらを、東京支部の活気を取り戻す集客マーケティング活動の重要な機会と位置づけ、しっかりと時間を投入して取り組みたいと思います。

集客活動は新たな局面へ

2020年１月以降新型コロナウイルスによる感染拡大が周期的に発生し、多人数が集合して開催する同窓会活動が困難になったことは周知のとおりです。たくさんの企画が中止になり悔しい思いをしました。やむにやまれぬオンライン開催ではありましたが、一方でプラス面にも目を向けてみましょう。

まずは、開催時間の制約、参加のための距離的制約から解放され、大人数による講演視聴ができ、海外からも参加できる点です。実際、以前開催したオンラインでの七夕総会や東京同窓会のSummer Festaでは、香港、シンガポール、ロンドン、ケニアなどから同窓生の現地リポートを交えた企画を実施するとともに、全国各地からの参加もありました。また、対面開催のテーブルごとのスピーチに代えて、ブレークアウトルームに分かれた少人数での交流も複数回できました。また、従来は会員とのやりとり

は、郵送はがきやFaxなどアナログが中心でありましたが、一気にオンライン化が進みました。理事会や作業会もオンラインでの開催が主流になり、理事の負荷が軽減されるなど明らかな利点も見えてきました。

オンライン開催は、対面での交流には満足度においてどうしてもかなわない面はありますが、これらの機能を有効活用することで、より満足度の高い「第３のコミュニティ」としての充実した同窓会活動を実現していきたいと思います。

【東京支部事務局長　大坪　勇二　（昭和63年卒）】

追　悼　　檀　豊隆さんを偲んで

関西支部

関西支部長　**小森田　憲繁**氏
（昭和46年卒）

小生が檀さんとお会いしたのは20年ほど以前だったと思います。元勤務先の東芝会館の地下で勉強会を企画され、これに私が参加したことが最初だったように思います。その後、関西支部の理事会が綿業会館であり、吉田紘一支部長（元住友生命社長）が関西支部長にご就任されるときに小生に同じ会社なので事務局長をやってほしいと言われ引き受けました。吉田支部長が亡くなってその後任として檀さんが支部長になられ事務局長と支部長として支部運営に携わりました。

支部運営に関してはよく相談に乗っていただいたし、温厚で優しい話し口で理事会の運営をされていました。いつも会場（釣鐘荘）近くの決まった場所で２次会を実施、話に花が咲いたものでした。懐かしく思いだされます。

その後、檀さんは芦屋の家から福岡に転居され、石橋支部長にバトンタッチされ、その後小生が後を継ぎました。福岡では支部総会の後に一杯やりながら関西の状況報告をしたものです。そうするうちに、檀さんは足のほうが少し不自由になられ、思うように動きができにくくなられました。それでも関西支部の総会には必ず出席され皆さんと仲良く話されていたことが思い出されます。

この度、突然の訃報に接し困惑しています。あの懐かしい笑顔にもう会えないかと思うと残念で仕方ありません。ご冥福をお祈りいたします。

関西支部副支部長　**中野　光男**氏
（昭和50年卒）

あの人懐っこい、いつもにこにこと笑顔で接してくれる檀先輩が亡くなられたとの訃報に接して、言葉もありません。もう二度とお会いできないのかと思ったら、ただただ残念で堪りません。

檀先輩が経済学部同窓会関西支部の活動に熱心に取り組んでおられたことは、私が関西の都市銀行に入ってから、転勤で関西を出た時以外は、関西支部総会には欠かさず出席されていたのでよくわかっていました。

あの阪神大震災が起こった平成７年前後に私が神戸市内の支店長をやっていたころ、檀先輩は東芝関連会社の神戸営業所の責任者だったと思いますが、よく訪ねてきてくれました。用件は、関西支部の年度幹事の就任要請と支部総会での司会役の引き継ぎ依頼であった記憶があります。実際に、平成８年６月の支部総会から若輩ながら、司会を務めさせていただき、その後事務局長を卒業する平成28年２月の支部総会まで、20年近く司会をやらせていただきました。この間、檀先輩はあらゆる面でサポートしてくれました。

ところで、檀先輩は平成18年２月の支部総会で、急逝された吉田支部長の後を引き継ぎ、関西支部長に就任されました。支部長時代の功績は、何と言っても、それまでは支部総会を平日、基本的に金曜日の夕方から開催していたものを、現役の若手が参加できやすいように土曜日の午後の開催に変更したことです。よく思い切ったことをしたものだと特に印象に残っています。

平成20年２月の支部総会で石橋英治支部長にバトンタッチするまで、理事会なども定期的に開催し、その後の２次会では酒を飲み交わしながら高尚な（？）議論に花を咲かせたものです。また、平成19年７月の見学会では、自宅のある芦屋方面を見学会の場所に選び、「谷崎潤一郎記念館」や「高浜虚子記念館」と併せて、普段めったに行くことのない

芦屋市内の名所・旧跡を案内していただきました。

福岡に移ってからも、関西支部の総会には出席していただきましたし、逆に福岡支部総会や卒業式の祝賀会などでは、気軽に声をかけていただき、旧交を温めることができました。

いろいろな思い出を残していただいた檀先輩のご冥福を心からお祈りして、追悼の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。どうぞ安らかにお眠りください。

関西支部事務局長代理　**清丸　泰司**氏
（平成2年卒）

このたびの檀先輩の訃報に接し、穏やかな眼差しと暖かい笑顔で接していただいたお姿をこれからお見掛けすることができないと思うと、とても寂しくてなりません。

檀先輩に私がはじめて声を掛けていただいたのは、平成初めの頃、大阪福島･野田阪神の「クラレ白鷺」での支部総会。懇親会は私の横に座られ、初回参加から、母校の歴史・学生時代の思い出、社会人としての苦労話などに花が咲いた記憶があります。

関西支部では、見学会や勉強会・ゴルフ会などの支部総会以外の行事もあり、出来る限り参加するようにしていました。しかし生保会社で勤務している私には転勤がつきもの。北九州、岐阜、東京へと異動した間は参加できませんでしたが、関西に帰ってくると檀先輩をはじめとする諸先輩方から「お帰り」と暖かく迎えていただきました。

これからの各種同窓会活動では、檀先輩がいつもされておられたように、ビール片手に各テーブルを回り、一人でも多くの同窓生の皆さんと旧交を温めたいと思います。

同窓会の楽しさを教えていただいた檀先輩、ありがとうございました。心よりご冥福をお祈りいたします。

檀さんのご遺族のご厚意で香典返しの一部を経済学部同窓会にご寄付いただきました。
ご香典ご供進の皆さまに厚く御礼申し上げます。

秋の見学会（令和４年11月19日実施）報告

関西支部では、今年の春に実施した「東大阪見学会」が大好評で、NHKの連続テレビ小説『舞い上がれ！』も10月から放送され、東大阪はドラマの舞台の一つとして大変注目されています。今回は理事会の皆さんのご要望で、東大阪シリーズの第二弾として、テレビに登場するスポットを巡ると共に、モノづくりの町の魅力をもう一度堪能いただきたく、東大阪オープンファクトリーイベント「こーばへ行こう！」の開催にも併せて、秋の見学会を企画・実施しました。

※「こーばへ行こう！」は今年で６回目、市内25か所の工場や店舗がイベントを実施し、工場見学ツアーやワークショップなど、各会場で趣向を凝らしたイベントが盛りだくさん！

午前９時45分に総勢16名が大阪市地下鉄千日前線北巽駅に集まり、外は暖かい秋日和で、空気が澄んでいて、透き通った青い空で、気分がよかったです。

徒歩10分程度で今回の視察先である株式会社盛光SCMに到着しました。会社建物の前の広場では、イベント開催していて、祭りでよく見かけるゲームや飲食を提供するキッチンカーなど点在し、地元住民がたくさん集まり、にぎわっていました。

私たちは屋上のロフトに案内され、そこで皆さんがくつろいだところで、盛光SCMの草場社長（こーばへ行こう実行委員長）が登場し、イベント開催の経緯、概要を30分ほど説明してくれました。

前回も紹介しましたが、東大阪市の製造業事業所数は5954と全国５位、政令指定都市を除くと全国１位の事業所数で、事業所密度も全国トップです。そのような同市では、住工共生が課題となっていて、廃業した工場跡地に住宅が建設されるなど、工場と住宅が入り混じったまちに変化し、騒音問題が発生し、工場の他所への流出に拍車をかけることになっていました。

この状況に対して同社は、市などと共に地域に工場を開放するイベント「こーばへ行こう!」に取り組み、草場社長は「完成品しか目にすることがない

消費者に、完成までの手間や、職人の技を見てもらうのも目的の一つ。事業承継の鍵は『人』。来場者の中にはいつか、一緒に働く子供たちもいるかもしれない」と話されました。

また、「イベントを通じで、モノづくり企業同士の横刺し（連携づくり）を促進できる」ことも、この取り組みの醍醐味であることがわかりました。東大阪市のモノづくり企業には、親会社との系列を持たない企業が多いという特徴があり、地域内の分業が発達し、大企業と中小下請けといった縦系列の関係のみならず、中企業と中企業、中企業と小企業、小企業と小企業といったように横のネットワークで構成されています。

草間社長の説明が終わると、見学会参加メンバーから人材育成、連携実績、経営戦略などたくさんの質問が出て、会場が熱気に包まれ、盛り上がりました。最後の別れに、草間社長が「今のままでいいと思った瞬間、成長が止まる。Stand Up ！」と書かれた大きな看板を持ってきて、記念写真を撮りました。苦境が続く中でも、中小企業は前向きにがんばっている。日本はまだまだ捨てたものじゃないと感じた瞬間でした。

屋上から１階のフロアに移動し、盛光SCM工場内を自由見学しました。見たことのない大きな機械、いろいろな形の金型、職人の実演と説明もあって、どこへ行っても人だまりができて大盛況でした。

予定より15分遅れて、工場を出て布施商店街へ向かいました。近鉄大阪線・奈良線の布施駅前に南北に広がる東大阪最大の商店街となっています。NHK連ドラ「舞い上がれ」のロケ地が点在し、全国各地からドラマのファンが殺到しているそうです。また、商店街は、日本一大きな「えべっさん」のある布施戎（ふせえびす）神社があり、昭和レトロな雰囲気、地元民に愛されるまちの銭湯、B級グルメなど地域の伝統と商売にあふれた豊かなまちで、海外観光客にも人気が出てきています。「商売繁盛の神様」えべっさんは、インバウンドに注目しているかもしれません。

昼食は前回同様、「大龍飯店」を選びました。美味しい中華が食べたい思いのほかに、もう一つの理由は、経営者夫婦が高齢により、年末最終営業日をもって店をたたむそうで、閉店を惜しんで、もう一度とのことで行きました。女将さんは特別に壺入り紹興酒を出してくれましたが、アツアツの中華料理とよく合い、ご馳走さまでした！そして、48年間、お疲れ様でした～飲みすぎたせいか、女将さんと記念写真を撮るのを忘れてしまいました。

午後の見学先は、人工衛星「まいど１号」などの航空部品の製造で培ったノウハウや技術を持つ「アオキ」です。現在、衛星は作っていませんが、世界的に有名な航空機のボーイング社や大手自動車メーカーなどに部品を供給しています。

最初に見たのが、遠隔操作可能な無人小型飛行機で、まだ試作機段階ですが、高い技術力を持っていると感じました。そのあと、研磨工房を視察しまして、目に入ったのがハイテックな機械で自動作業と熟練の職人による手作業が共同のスペースで行われていました。いくら技術が進歩しても、人が必要だ

なと思いました。午後４時過ぎ、（株）アオキの視察が終了しまして、別れの際に、谷村事務局長から若い二代目社長に、九州銘柄の焼酎を贈呈しました。青木社長は「今日いちです」と喜んでくれ「もし自分が社長引退したら、教育をやりたい」と言われました。モノづくりは人づくり、繋がっていますね。

【関西支部理事　凌　雲翔　（平成16年卒）】

福 岡 支 部

１．九州大学アカデミックフェスティバル＆ホームカミングデー 2022の報告

九州大学福岡同窓会 貫会長の挨拶

2022年11月５日（土）、九州大学アカデミックフェスティバル＆ホームカミングデー2022が３年ぶりにリアルで開催されました。会場は九大伊都キャンパスのアイスナーホール。感染対策として規模を縮小しての開催で、九州大学同窓生を対象とした講演会と交流会がメインでした。九大祭も同日開催。

まず石橋総長がご挨拶。総合知で社会変革を牽引する大学となるため、ビジョン2030を策定、持続可能で幸せな社会づくりをめざしたい、とお話された。次に、貫経済学部同窓会長が福岡同窓会会長としてご挨拶。貫会長からは福岡同窓会としても、九州大学のビジョン達成に向けて、全力で支援したいと述べられた。総会としての福岡同窓会の活動報告は、福岡同窓会副会長の久枝九州大学理事が説明されました。

講演会は、九州大学総合研究博物館の福永将大さんが､箱崎キャンパス跡地の発掘調査を踏まえて｢発掘された箱崎千年・九大百年の歴史」について興味深いお話をされました。箱崎キャンパス跡地は、平安時代の終わりに土地ができ、人が住みはじめ、元寇防塁、中世・近世の集落・墓地としての利用の後、近代現代で九州大学が設置されたという歴史をもつということ。箱崎の元寇防塁は、九大医学部の中山平次郎教授がその存在を指摘されていたが、今回の発掘調査で中山仮説が検証されたということ、箱崎キャンパス跡地の元寇防塁は、生の松原や今津の元寇防塁と比べ脆弱な石積みの構造となっていること等を紹介されました。

続いて、九州大学大学院人間環境学研究院の堀賀貴研究院長と小川拓郎さんが、三次元デジタル記録保存の技術を使って、箱崎キャンパスをVRで甦らせる実演を披露されました。2013年に記録保存の見地からデジタル化を決定し、2014年から作業を開始、３次元スキャナーにより、レーザーを使って膨大な点群データを収集、見事に箱崎キャンパスデジタル・ツインを見せていただいた。今後、Webで公開、いつでも懐かしい箱崎キャンパスがみれることになるそうです。

講演会終了後講演会場隣のアイスナーロビーで、ホームカミングデー交歓会が開催、軽食をとりながら、参加者同志、懇親を深め、講演会の感想や同窓会活動等について歓談しました。その後は九州大学同窓会連合会総会、寄付者感謝の集い、伊都キャンパスバスツアーなども開催されました。

【文責：福岡支部事務局】

２．福岡支部交流ゴルフ会､第71回コンペを開催！～ 11月13日（日）伊都ゴルフ倶楽部

EY新日本有限責任監査法人
金融事業部九州支部
パートナー 公認会計士
中園　龍也氏
1995(平成7)年卒

「第71回九大経済学部同窓会交流ゴルフ会」にて優勝させて頂いた中園龍也（Ｈ７年卒）です。今回は、100を切っていないにもかかわらず優勝してしまい大変申し訳ありませんでした。大先輩方から苦情やお叱りを受けそうなので(もう一部では受けていますが…)、冒頭に謝らせてください。

現在、EY新日本有限責任監査法人金融事業部九州支部に所属する公認会計士として、西日本シティ銀行を中心に九州各県の金融機関の監査に従事しており、今回ご参加されている、大先輩の村上英之様(S58年卒)、大先輩の友池精孝様（S59年卒)、ちょっと後輩の萩野裕司様（H14年卒）には日頃から大変お世話になっております。

当日は一週間前からの雨予報にもかかわらず、雨はパラパラでコンディションとしては最高の状態で回ることができました。イン10番からのスタートでしたが、一打目OB、打ち直しの３打目チョロと上がってみればいきなりの13打で長い一日が始まりま

した。その後はOB６発をまぶしながら、パーを取ったり、トリを打ったりで、いつも通りのメリハリのあるゴルフを展開し、終わってみればアウト48イン53と目標である100切りは叶いませんでした。が、13打が効いたのかHDCP30も頂き、NET71と顰蹙のスコアで優勝してしまいました。

月１ゴルファーですが、まだまだ成長は諦めておりません。EY新日本有限責任監査法人の先輩である宮本義三様（Ｈ３年卒）に誘われて参加している古賀ゴルフ会で、大先輩の道永幸典様（S56年卒）、大先輩の村上英之様（S58年卒）、先輩の田川真司様（Ｈ２年卒）、先輩の末次隆様（Ｈ２年卒）、先輩の緒方寛治様（Ｈ４年卒）と、泣きそうになりながら回っている効果もちょっとずつ出てきていると感じております。皆様のスコアにはまだまだ遠くおよびませんが、ちょっとずつでも近づいていければと思っております。

今回、アスリートゴルファーの大先輩である柴田祐二様（S59年卒）、会社社長で豪快な大先輩である石原紀幸様（S60年卒）、堅実で安定感あるちょっと後輩の稲富勝則様（H10年卒）とご一緒の組で、緊張感ありながらも楽しく回らせて頂きました。有難うございました。

また、毎回幹事を務めて頂いている大先輩の高木直人様（S57年卒）や同期の堀正英様（Ｈ７年卒）にも感謝申し上げます。

今後、ゴルフやゴルフ以外の交流が益々盛んになることを祈念し、交流ゴルフ会の報告とさせて頂きます。

最後になりましたが、このようなスコアで優勝してしまい、大先輩方、皆様、本当に申し訳ありませんでした。今後はお叱りを受けないように切磋琢磨しますのでご容赦頂ければと思います。

３．同窓会福岡支部とのつながり

ＦＦＧ証券株式会社
企業金融部長
（福岡銀行より出向中）
森　大輔氏
2004（平成16）年卒

東証上場記念の木槌と
撮影協力：冨田和久先輩（S61卒）

この度、2022年12月の福岡支部忘年会において、「同窓会賞」を受賞した（ビンゴ当選ですが）、平成16年経済学部経工卒の森大輔です。「同窓会賞」の副賞として、同窓会報に寄稿できることになっていますので、今回は、九大経済在学時を振り返りつつ、同窓会福岡支部とのつながりを中心に寄稿させていただきます。

■キャンパスライフ

六本松キャンパスでの教養、箱崎キャンパスでの専門の両課程が、今では懐かしい。

中学と高校ではソフトテニス部（後衛）で活躍しましたが、小学時代の夢が諦められずに大学では硬式野球部に入部。途中、軟式野球部への転部を経るも卒業まで完遂。並行して、磯谷ゼミでのミクロ経済学への没頭、家庭教師や福岡ドームビール売り含むアルバイト、友人たちとのコンパ開催や雀荘通いに加えて様々な公営ギャンブルの経験等、実証実験を含めた経済学研究も貫いたキャンパスライフはとても有意義でした。大学時代の友人の多くが地元（県外）に戻り、頻繁に集まれないのは少々寂しく感じています。

■就職活動

マスコミ志望であったため、３年次夏には西日本新聞社として初めて企画した「第一期インターンシップ（記者職）」へ参加し、秋にはテレビ局等の面接で全国を飛びまわりました。今では当たり前ですが、エントリーシート提出も「紙⇒マイナビWEB」移行したばかりで、すべてが手探りでしたが、「早くやったもん勝ち」的要素も大きく、就職の厳しい時期ながら楽しい就職活動でした。某ブロック紙新聞社記者職での内定等もいただきましたが、最後の最後、金融関係で唯一受けていた福岡銀行との「ご縁」を一番に取りました。今流行りの「ワークライフバランス」を重視したといえばそうかもしれませんが、某新聞社では「結婚式に会社の人がほとんど参加できないかもしれない」と私自身が不安に感じたのが決め手でした。やはり考えが若かったですね。

■大学卒業後

卒業後も会社の資格試験等の度に箱崎の文系キャンパスに伺っていましたが、遂に、文系キャンパスや汗を流した野球場も更地になりました。箱崎地区は、次の展開に向けて動き出していますし、再活性化は私の地元千早（昔は最寄りが西鉄名香野駅でした）から近いこともあり、個人的にも楽しみにしています。先日、伊都キャンパスに訪問した機会に、卒業生として久々に学食も堪能しました。定番のカレーをチョイスしましたが、なんだか六本松時代や箱崎時代をしみじみと思い出し、余韻に浸ってしまいました。

■入社、入籍、子育て

会社に入社して、学生時代から付き合っていた２歳年上の子（以下､｢奥さん｣）と､入社２年目に入籍。自分は男４人兄弟の末っ子ですが、一人っ子で育った奥さんの希望もあり、結婚後10年の間で４男２女計６人の子宝に恵まれました。現在、上は高校２年から下は小学３年までとまだまだあと10数年はしっかりと稼がないといけない状態ですが、子育てを通して自分も成長させてもらっていることを常々感じています。物事の捉え方や考え方については変化というより､かなり｢幅と奥行き｣が広がった感覚です。

実は、奥さんとの出会いも、｢親知らずを抜きに行った歯医者（九州大学病院歯学部）での待合患者同士｣という奇遇。やはり、九州大学との強い｢ご縁｣を感じています。

出雲大社で8人家族の記念写真

■同窓会との出会い

現在、同窓会終身会員です。また、福岡支部の評議員および運営委員をしております。

同窓会との出会いは、平成16年新卒で福岡銀行へ入行し、当時の職場の先輩とともに例年６月開催の同窓会総会へ参加したところに遡ります。その後、平成20年頃から会社の経済学部同窓会事務局として総会等参加取りまとめをさせていただき、着々と同窓会熱が入っていった記憶が（本寄稿に際して）よみがえってきました（笑）。転勤等もあり、コロナ流行直前より事務局の仕事は後進に譲っています。なお、2021年７月よりFFG証券へ出向中（出向元は福岡銀行）です。

■同窓会活動における当時の自分の考えと福岡銀行同窓会事務局（当時）としての役割

福岡銀行は同窓会総会に大挙して押し寄せる風習があります（近年はコロナ自粛中です）ので、同窓会総会では受付が混雑しないよう｢福岡銀行専用受付｣を別途設置しております。福銀同窓会事務局の私は、初参加の新入行員を歓迎・激励するため、毎年受付窓口に喜んで立ち続けていました。総会のあとの二次会も定番でしたし、手配や段取りも楽しんでやっていました。当時の同窓会活動における自分の考えは、①同窓会での先輩方との接点を通して、たくさんの刺激や学びを得ることで、自分自身の成長につなげたい（実際につながったことが多い）、②自分よりも若手世代（特に同会社内）に、同窓会活動により一層積極的に関与してもらえるような雰囲気づくりをしたい、③九州大学経済学部同窓会事務局の国生様や髙木事務局長とのご縁を大切にし、社内社外の連携を福銀の事務局としてサポートしたい　という３つでした。

■同窓会とのつながり

そんな中、H26年に、｢同窓会をさらに盛り上げよう｣という趣旨で選任された｢運営委員会｣の運営委員にも入れていただき、島田先輩（S54卒）や髙木先輩（S57卒）、田川先輩（H２卒）をはじめとした諸先輩方と共に、同窓会を盛り上げるための施策などを語り合うようになりました。貫会長ご就任以後、同窓会は着実に盛り上がっています。

九州大学経済学部の先輩たちは、個性の強い方も多く、大変刺激を受けることが多い気がします。その中で、脈々と引き継がれている｢後輩思い｣。後輩は先輩から学び、先輩は後輩へ惜しげもなく教える。九州大学経済学部の良さというか凄さは、勝手な自己解釈ですが｢大きな度量を持つ先輩方が成せる『人間教育』｣にあるのではと考えています。

どこの会社に勤めているからとかではなく、一人の人として、様々な考えを持つ同窓の先輩後輩との人間関係を築けるのが、同窓会の良さです。まだまだいろんな部分で伸びシロ十分な40歳代ですが、同窓会とのつながりを通して｢人として｣さらに成長していきます。

■同窓会活動について改めて

福岡支部における同窓会活動は、春の同窓会総会、年末の忘年会に加えて、春と秋各１回の懇親ゴルフが例年企画されています。私個人、総会は皆勤です。

なお、春の同窓会総会は、新卒の社会人になったばかりの同窓生も奮って参加できるように様々な配慮がなされています。ただ､新社会人の皆さんは｢『同窓会とはなんぞや』がわからない｣という心配もあるかと思います。でも大丈夫です。そんな時は、近くにいる先輩に勇気を出して質問してみてください、｢しっかり丁寧に｣教えてくださいます。

さらに、総会には各種記念講演も行われ、九州大学経済学研究院長のご参加もあり、少々離れていたアカデミックな話題にもしっかりと触れることがで

きますよ。

また、懇親ゴルフにおいては副支部長でもある道永先輩（S56年卒）の幅広い声かけに賛同して参加メンバーは近年大いに増加しています。ここ数回はコロナ禍のため表彰式に参加できないのが残念ですが、ゴルフを通した懇親の輪がしっかりと拡がっています。

これまで参加したことがない方は、この機会にぜひ参加検討してはいかがでしょうか。

■最後に

コロナ禍もありますが、同窓生でこの時代をさらに力強く駆け抜けるため、同窓生一同に会して「松原に」を大合唱できる日をいまから楽しみにしております。

本寄稿に際しての、髙木事務局長はじめたくさんの方のご協力に御礼申し上げます。

４．お知らせ

昭和54年卒の嶋田正明さんから、下記のようなお知らせがありましたので、ご案内申し上げます。

＜故 大屋祐雪名誉教授を偲ぶ会開催のご案内＞

大屋先生は令和３年９月15日他界されました。コロナ禍で家族葬となり、一周忌もできませんでした。ご子息らと、いつも通りの在校時、卒業後のゼミ会で皆が集い語るのが故人の意志に沿うだろうと話しました。

大屋ゼミ・濱砂ゼミ（統計学ゼミナール）の卒業生は別途連絡のつく限りご案内します。日程は決めていませんが、東京、大阪での偲ぶ会も実現に向けて動きます、この案内を見たゼミ卒業生はぜひご一報ください。

日時：令和５年９月10日 日曜日　11時30分～
会場：福新楼・福岡市中央区今泉１－17－８
会費：6000円程度
幹事：嶋田正明（昭和54年卒）
madamihs@gmail.com
携帯 080－4285－4591

＜昭和48年入学生　古希同窓会のご案内＞

筥崎宮で神事を行なって、諸処訪ねた還暦同窓会から10年経ちます。新旧キャンパス探訪バスツアーなど計画中です。参加確定でなくてもご興味のある方は連絡ください。詳細は再度連絡します。バスの手配など参考にします。

日時：令和５年10月14日土曜日　13時～
場所：九州大学伊都キャンパス　亭々舎（予定）
連絡先・事務局：嶋田正明
madamihs@gmail.com
携帯 080－4285－4591
クラス担当：Ｌ９坂梨（旧姓穎川）、 L10嶋田、L11立花、L12・兼関東担当吉元
関西担当養父

退職記念挨拶

大学人としての58年を越えて

九州大学名誉教授
津守　常弘氏
九州大学経済学研究院
［執筆・構成・編集］**潮崎　智美**氏

令和４年３月に、58年にわたる大学教員としての生活にピリオドを打たれた津守常弘先生の退職記念特集を企画しました。

津守先生は、1970年の九州大学ご着任後23年の間に、149名の卒業生と７名の研究者を輩出されました。また、津守先生が九大ご着任を機に立ち上げられた九州会計研究会は、３世代にわたって引き継がれています。さらに、九州会計研究会の拡大版としてサマーセミナー in九州が年１回開催されており、津守先生を慕い、教えを請う研究者の皆さんが、全国から九州に集まって来られます。

下記の文章は、2018年２月10日の津守ゼミOBOG懇親会（卒寿お祝いの会）、および2022年３月20日の九州会計研究会における津守常弘先生のスピーチを抜粋・編集したものです。津守先生からのお言葉に代えて、ご紹介いたします。

津守常弘先生略歴
昭和５年２月10日　和歌山県生まれ
昭和24年３月　和歌山経済専門学校（旧制･現和歌山大学）卒業
昭和28年６月　大阪商科大学（旧制・現大阪公立大学）卒業
昭和34年３月　京都大学大学院経済学研究科修士課程修了
昭和37年３月　京都大学大学院経済学研究科博士課程単位習得満期退学
※大学人としてのご経歴
昭和37年４月―昭和45年９月　立命館大学経営学部
昭和45年10月―平成５年３月　九州大学経済学部
平成５年４月―平成12年３月　神奈川大学経済学部・経営学部
平成12年４月―平成21年３月　九州情報大学経営情報学部
平成22年４月―平成23年３月　保健医療経営大学保健医療経営学部
平成25年４月―令和４年３月　九州情報大学経営情報学部
九州大学名誉教授、神奈川大学名誉教授、九州情報大学名誉教授

※OBOGへ向けて、近況について

今後私がどれだけ生きられるかわかりませんが、せめてギリギリまで研究をやりたいと思っております。

子どものころ、幼稚園はキャソリックの幼稚園に通っていましたので、日曜学校に必ず行くわけです。だからいまだに讃美歌を毎日のように歌います。好きですね。讃美歌のメロディーが非常に心にしみます。そのせいもあるのですが、みなさんご存知だと思いますけれど、『星の界（ほしのよ）』という歌もよく歌うのです。これは讃美歌312番の替え歌です。『月なきみ空に　きらめく光』から『いざその星影　きわめも行かん』で１番が終わり、２番は『雲なきみ空に　横とう光　嗚呼洋々たる　銀河の流れ　仰ぎて眺むる　万里のあなた　いざ棹（さお）させよや　窮理の船に』です。

子ども心にも『窮理の船』はものすごく魅力的なのです。長く理を窮めるというのですか、「理」というのは子どもですからわからないのですが、何かをずっと求めるということです。子どものころ、エジソンなどの伝記をたくさん読んで、そういう風になりたいなと思っていましたから。それがいまだにずっと続いているのです。だから、とにかくその理を窮めたい。これはもう果て無き旅です。とにかくやりたい。そういう風に今でも子どものように思っています。

その気持ちが続く限りは生きているのだろうなと思います。その生きている時間が少しでも長くなるように、酒をやめて、という風にですね、人は言うのですけれども（笑）。私は長生きするために毎晩飲みます。元気でやります。これを機会に、私とは関係なく、皆さんお集りになって、これから先長く協力して頑張っていただきたい。これが一番言いたいことなのです。どうぞ頑張ってください。

2022年３月20日第219回九州会計研究会にて
左から戸田龍介氏（神奈川大学副学長）、徳賀芳弘氏（京都先端科学大学副学長）、津守常弘先生、大石桂一氏（九州大学経済学研究院長）

※個性、異なる考え方および会計学研究について

皆さんご存知のJohn Stuart Millの有名な“On Liberty”（『自由論』）があるのですけれども、これは非常に小さい本で、わずか50ページ、60ページぐらいかなと思います。その中に、自由ということについての非常に重要なことが述べられていたのを、わたしは第二次大戦が終わったあと、軍の学校から帰ってきて15歳の時に初めて読みまして、非常に感銘を受けて、その衝撃がいまだに残っているのです。

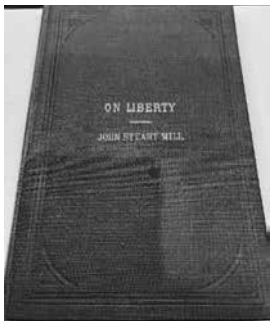
簡単に言ってしまいますと、『いろんな考え方が違うことが非常にいいのだ』。人間というのは、ひとりの考え方あるいは数人の人たちの考え方が真理であってそれに従っていけば幸せだ、というものではない。そう思われていても、ずっとやっている間に、行き詰まるときもありますし、また破綻する時もある。そういう時に今まで一般にそれが良いと思われてなかった考え方の中に救いの手があるというふうに、各人各様の考え方、意見を持っていることに意味があるのだと、当時、解釈しました。

これは我々が生きている限りおそらくずっと続いているものだと思っています。研究会の中の統一性と言いますか、あるいは共通性ですか、そういうものと合わせて各人各様に個性というものを大いに発揮する必要があるのだろうなと。そこで本当に研究会というものが生き生きとして発展して行くのだろうなとわたくしは思いますし、公正価値の問題を取り上げましても、非常に重大な問題、解けないのではないかというような問題があるような気も致します。

ご存知のように、公正価値概念は経済学的な概念であり、John Burr Williamsが提唱した考え方が大いに影響を及ぼしているということがございます。要するに、オーストリア学派の考え方というものが

非常に大きな影響を及ぼしていると言ってよいだろうと思います。

ところが、J. M. Keynes, J. K. Hicksのような著名な経済学者たちも認めていますが、一つの理論についての真理性というものを強調するというのはやはり限界がある。第一、公正価値をめぐる問題の発端ということに遡りますと1883年に始まったドイツ歴史学派とオーストリア学派との論争に始まるわけです。それは依然として、今でも、100数十年続いている。それほど解きにくい問題です。なぜかと言いますと、歴史と数理との対立の問題ですので、これは解きえないと言ってもいいくらいの対立なのです。そういう問題に絡んでいるのが公正価値の問題である。あるいは一般に我々が直面している、会計学の分野で直面している、現在のいろいろな問題と関連しているのだろうと思います。



『自由論』
1926年版（津守先生所蔵）

そういうことがございますので、偉そうに言っているのではなくて、私自身も悩んでおりますので、共に悩んでいただきたいとお願いして、私が去っていくご挨拶にしたい。

「人間は誤りのないものではないということ、人間の真理は大部分は半真理であるにすぎないということ、相反対する意見を十二分に最も自由に比較した結果として出てきたものでない限り、意見の一致は望ましいものではなく、また人間が現在よりもはるかに、真理のすべての側面を認識しうるようになるまでは、意見の相違は害悪ではなくてむしろ為めになることであるということ、―およそこれらの諸命題は、人間の意見に対して適用しうるのと同様に人間の行為の様式に対しても適用しうる原則である。人間が不完全である間は、異なった意見の存在していることが有益であるのと同様に、異なった生活の実験の存在していることもまた有益なのである。」

「しかし、唯一の確実な永続的な改革の源泉は自由である。なぜならば、自由によってこそ、およそ存在している限りの個人と同じ数の独立した改革の中心がありうるからである。」

John Stuart Mill "On Liberty" 1859.

塩尻公明・木村健康訳『自由論』、岩波文庫、1971年、114-115頁および142頁。

春風秋霜なお人柄

京都先端科学大学副学長
京都大学名誉教授
徳賀　芳弘氏
1978（昭和53）年卒
1980（昭和55）年博士入

2022年３月。津守常弘先生が九州情報大学を退職され、これをもって研究者を引退すると宣言された。立命館大学で最初に教壇に立たれて以来、約60年にわたって研究・教育に真摯に取り組んでこられたことは驚嘆に値する。わたしは学部・大学院・助教授時代に九州大学で先生と一緒に過ごし、その後も研究会や学会でお会いしたことを含めると、なんと46年間もお世話になってきた。その間、研究のみならず、ものの見方・考え方、さらには生き方についても多くの示唆を頂いた。何か困った問題にぶつかったとき、難しい選択に迫られたとき、自分の判断から一旦離れて、津守先生ならどのように考えて、どのように意思決定されるであろうかと思料することが多い。先生の教えは自分の見方を相対化して考えるために、あるいは問題を俯瞰するための高い視座としてわたしの中にある。

今回有難くも先生との思い出を書く機会に恵まれた。先生との出会いから、これまでご指導いただいてきた貴重な時間を振り返ってみたい。そして、超長期にわたって大学教員を無事に務めあげられたことに心よりお祝いを申し上げたい。

［先生との出会い］

わたしが津守ゼミに入ったのは、1976年のことであった。当時、わたしは何を勉強したいのか、また将来どんな仕事に就きたいのかについて具体的な考えは持っておらず、なんとなく津守ゼミの面接を受けたところ、先生のあの温かい笑顔と静かな語り口に魅了され、それ以降今日までご指導を受けることになった。山ほどの思い出の中で最初に思い出すのは、わたしを含む新ゼミ生の歓迎会であった。場所は「水たき長野」。白濁スープで鶏肉や野菜を炊き、門外不出の秘伝の酢醤油で味わう博多の老舗である。ところがわたしは鶏肉を食べることができない（ほかの鳥肉は食べることができる）。それほど好き嫌いのない方だが、鶏肉だけは食べることができない。アレルギーや宗教には関係なく、単なる好き嫌い（＋子供の頃の体験）によるものであるが、この出来事

は津守ゼミに入ったばかりのわたしにとって最初に訪れた大きな試練となった。立候補などそれ以前もそれ以後もしたことはないが、この時ばかりはゼミ幹事に立候補した。なぜなら次回のコンパから鶏肉の店を選択しないようにするためである。

［楽しかった学部ゼミ］

当時の津守ゼミでは、先生はゼミ生間のディスカッションを静かに聞いて、時折間違いをただされるか、なぜそのような解釈・発言となったのかを尋ねられることが普通であった。先生は、学生たちがおかしな質問をしても、的外れな回答をしても、頭から否定されず、発言内容の確認やその背景を尋ねられて、その対話の中で学生たちが自分の間違いに気づくように誘導されていた。言い換えれば、学生が自分で間違いに気づき、自分の力で正すことができたと錯覚させることが学生の成長に役立つと考えておられたのだと思う。

ゼミは、テキストについて３年生が中心となって報告を行い、４年生がwhy型の質問［××はなぜか］をしていたと記憶している。３限目・４限目を使っての200分のゼミは、毎回議論が白熱して大抵30分～１時間近く超過した。わたしがゼミに入った当時においてディスカッションをリードされていたのは、現在公認会計士をされている工藤重之さんであった。怖い先輩が沢山いたが、わたしは物おじしない方なので、先輩方に結構言いたい放題言っていたという記憶がある。今から思えば「なんと生意気な奴だ」と思われていたに違いない。津守先生の学部ゼミには大学院生の佐々木利光さん（後に北九州大学講師）も参加されていた。佐々木さんにはご自宅に何度かお招きいただき、ご馳走にもなった。優秀で非常に明るい方であったが、夭折されたことは本当に残念である。篠栗町の町長を長く務めている三浦正君はゼミの１年後輩で、懇親会で大活躍する人であった。他にも沢山の先輩・同僚・後輩に親しくしていただいたが、紙幅の関係から省略させて頂きたい。

今では怒られそうだが、時々（しょっちゅう）、ゼミの時間にソフトボールをした。時には津守先生も参加して一緒に汗を流しておられた。津守ゼミは全学のソフトボール大会で優勝こそ逃したが、いい成績（確か準優勝）を残したと記憶している。

［拡大していった大学院ゼミ］

大学院ゼミは毎週金曜日の13時～18時という長時間のものであった。当初は津守先生と当時経営財務論の助教授であった丑山優先生以外は九大院生のみであったが、その後、まず福岡大学の院生であった椛田龍三さんと中九州短期大学の高梠真一さんが加わり、その後さらに、佐賀大学の桑原幹夫先生と西川登先生、西南学院大学の土方久先生、当時九州共立大の酒巻政章先生が参加され、それなりの大所帯となった。大学院の先輩は佐々木さんのみで、同期には、大下丈平さん（九大名誉教授）、河野信一さん（津守ゼミの一期生で後に鹿児島大学助教授、優しい方であったが事故で夭折された）がおられ、わたしを含めて院生は４人であった。わたしが最年少ということもあって、大抵わたしがコーヒーの準備と皿洗いをしていたように思う。その後、森美智代さん（元熊本県立大学）、斎藤久美子さん（和歌山大学）、北山弘樹君（関西大学）、戸田龍介君（神奈川大学）という４人の後輩ができた。

津守先生に厳しくお叱りを受けた記憶はあまりないが、金曜日の大学院研究会に15分遅刻をした際には厳しくお叱りを受けた。「君は15分×８人=120分、皆の２時間を無駄にした。償うことはできるのか」というお言葉は40年以上たった今でも忘れられない…が、今でも時々遅刻する。

また、わたしは自分が書いたものを先生に強く批判された記憶もあまりない。たぶん、気が付いていないだけであろう。先生は、いつも「もう少しですね」というニュアンスのコメントをされるだけで、この論文はだめだとか、ここが間違っているといった指導はあまりされなかった。今思えば、この「もう少し」は「まったくだめだ」という意味であったのかもしれないが…。

［500回以上ご馳走になったこと］

津守先生には、おそらく500回以上食事をご馳走になった。木曜日の学部ゼミ、金曜日の研究会の後、大野城市にあるご自宅に車でお送りすることがあり、途中で、「浜勝」か「リンガーハット」に立ち寄ることが多かった。わたしは当時、浜勝では、キャベツで１杯、トンカツで２杯くらいのご飯を食べるのが普通であったが、先生（当時50歳前後）も大きなトンカツをぺろりと平らげておられた。また、ご自宅にも数人で何度もお邪魔して夜遅くまで酒食をふるまっていただいた。お二人のご子息よりもわれわれの方が先生のお時間を占有し、さらにご馳走になっているのではないかと心配になったことがあった。「奥様にもご迷惑をおかけしました。心より感謝しています」。

九大（箱崎）から大野城市の先生のご自宅までの30分は、先生の研究に対するお考えや大学人としての生き方を知ることができる、当時のわたしにとっ

て最も貴重な時間であった。５時間を超える研究会よりも価値のある30分であったかもしれない。

[先生のご研究とお人柄]

先生のお人柄はまさに「春風秋霜」という言葉が当てはまる。普段は春の風のように暖かく、研究に関しては秋の霜のように厳しい。いつも先生の周りには笑いがあり、多くの人たちが集まった。日常生活ではいつも他人の気持ちを大事にされ、明るいあたたかな雰囲気を大事にされた。他方で、ご自分の研究に関しては本当に厳しい方であった。何度も何度も原稿を書き直され（当時は手書きが多かった）、それでも満足されず、推敲に推敲を重ねて、精緻で芸術作品のような隙のない論文を書かれていた。睡眠不足で青い顔をされながら、「命を削りながら論文を書いている」という凄みのある言葉を笑顔で言われていたことも忘れられない。

先生は研究においてはこれ以外にないところまで論理性を詰めておられた。それは、実証は論証の一部という先生のお考えによく表れている。別の言い方をすれば、論理的に考えてこれ以外にないということを明示できれば実証は不要ということである。しかし、他方で、先生のご研究は徹底的なエビデンスの渉猟もされていた。利用可能なデータは全て調査し尽くされており、研究姿勢は極めて実証主義的であった。

先見性があり、お釈迦様の手の平ほどではないにせよ、皆の動きがよく見えていた方であるが、人間関係でうまく立ち回るといったことを極力嫌われた。出世や利益に対しても非常に禁欲的で潔癖な方であった。そのため、あれ程の能力をお持ちでありながら、必ずしも順風満帆ではない時期もあり、苦悩されたこともあったように思う。それらの時期を含めても、ご自分の信念を貫かれた先生の研究人生は素晴らしいものだったに違いない。

[徳賀の近況]

わたしの九州大学時代の様子と近況も書くようにとのことであったので、少しだけ書くことにしたい。九大の大学院を修了し、１か月九大助手をした後に熊本商科大学（現熊本学園大学）に３年11か月勤務した。熊本商科大学では大学院時代ほとんど勉強したことのなかった原価計算の担当となり、講義の準備に追われた。また、熊本商科大学在任中に12キロも体重が増えたのは、毎週二日、夕食後に夜の講義があり、そのあと、高梠真一先生（現久留米大学）と夜食（熊本ラーメン、ちゃんぽん、お好み焼き）を食べ歩いたこと（夕食を食べた後にである）が最大の要因であると思われる。九大に戻り、２年目に文部省在外研究員としての米国留学の機会を得た。在外研究員は10か月であったが、結局シアトル（ワシントン大学）に２年滞在した。最初の１年間は米国の食事が合わず10キロ以上痩せた。九州大学経済学部に2002年までの16年半在籍し、徳賀ゼミ卒業生は150名以上、教員となった大学院修了生は９名（大石桂一氏、潮崎智美氏、異島須賀子氏、田川晋也氏、進美喜子氏、平川茂氏、小川淳平氏、高木正史氏、宮原裕一氏）くらい送り出したと思う。九州大学在籍中、とりわけ最初の12年は人生でも最も楽しかった時期である。

九州大学時代に京都大学で講義

2002年の９月に京都大学経済学研究科に移籍し、2006年より経営管理大学院の教授を併担した。それ以降、京都大学で財務担当理事補、経営管理大学院長（研究科長）、副学長を歴任した。京大に18年半在籍したが、後半は大学執行部の仕事に追われ、副学長時代には年間150日を超える出張の年もあり、ろくに研究できなかった。津守先生も口には出されなかったが「徳賀は何をしているのだ」と思われていたに違いない。申し訳ありません。

2020年３月に京都大学を定年退職して、京都先端科学大学（KUAS）という小規模ながら５学部、11学科、大学院、ビジネススクールを持つ総合大学に移った。京大定年前年の８月に、京大の元副学長で、当時京都先端科学大学経済経営学部長の西村周三先生と前田正史学長が京大のわたしの研究室までリクルートにお出でいただいたこと、一番早く声をかけていただいたこと、現在の自宅からドアツードアで30分ほどで通えることもありここで働くことに決めた。現在、この大学で副学長・理事・経済経営学部長・教授をしている。2019年に創設された新しい大学であり、伸びしろが大きいことが自分にとっては大きな魅力である。

向かって右から
津守先生、Prof.Dieter Ordelheide、徳賀

鉄人津守先生に寄せて

篠栗町長
三浦　正氏
1979（昭和54）年卒

この度「日本最高齢まで教壇に立たれた津守常弘先生の退職記念の特集記事を載せる」と、経済学部同窓会事務局からお話がありました。数多くいらっしゃる津守ゼミのＯＢゼミ生のなかで、是非私に、津守先生にまつわる記事を書いていただきたいと誠に光栄なお話をいただきました。他の寄稿者として１学年先輩の徳賀芳弘先生がおられると聞いてます。徳賀先生はゼミ生として同じ時期に席を置いた尊敬する先輩ですが、多分徳賀先生は、津守先生が長く研究されている学問的なお話をされるものと思い、私は津守先生からご指導いただいた言葉を思い出しながら書くことにいたします。

それにしても津守先生が御年93歳になられることを改めて思うとき、このような偉大な先生の下で僅かの期間とはいえ御縁をいただいたことに唯々感謝の念でいっぱいであります。

私の部屋の書棚には先生の『配当計算原則の史的展開』、『会計基準形成の論理』が『現代会計の国際的動向と展望』（津守教授還暦退官記念著作編集委員会編）とともに置かれています。このような書き方はおかしいかもしれませんが、内容が難しすぎて大事に飾っている私の宝物なのです。

『会計基準形成の論理』は2002年５月に先生から「新しい本がやっとできたから」と直々に頂戴したもので、先生のご署名もいただいています。1930年２月のお生まれである先生のご年齢を考えると、先生この時が72歳。今年69歳で、池の鯉のようにアップアップしながら仕事をしている私からすれば当時もとんでもない鉄人ぶりだったと思います。

今年はメールにて新年のご挨拶をいただきましたが、2022年の年賀状には、「私は、今春から、この10年余望んで已まなかった生活、ひたすら研究のみに励む生活に戻ることができることになり、身の引き締まる思いに浸っております。」とお書きでした。91歳を超えてなお、情熱溢れるこのお言葉そのものが、若輩者である私のこの上もない鼓吹の言葉であります。

さて、話は1977（昭和52年）年春、３年生となっていよいよどこかのゼミにお世話になるという時に、先輩や同級生の、「来るもの拒まず」の津守先生の会計学のゼミが面白いらしいよとの情報を頼りに、他の先生の研究室には目もくれずに津守ゼミにお世話になることにしました。

当時の３年生は12人だったでしょうか。天井まで届きそうな書棚一杯の専門書に埋もれながらプラウダやドイツ語、英語の新聞を熱心に読まれてある先生の姿に、舞い上がるようなアカデミックな雰囲気を感じ、先生のなぞかけ問答のような軽妙洒脱なお話しを拝聴しつつ、このゼミに入って良かったなあとしみじみ感じたものです。ゼミの日が待ち遠しくて、その日ばかりは熱心な経済学部生になっていた自分を思い出します。

研究室は溢れんばかりのまさに大所帯です。直ぐに、じゃあ今からソフトボールをしようかとか、今度筋湯で合宿しようか、萩の民宿に行こうかと遠征も度々でしたが、楽しかったばかりで何を勉強したのか今となっては全く思い出せません。ただ、部屋の書棚の隅に『会計発達史』があるので、何となく自分のテーマにしていたような気がします。

津守先生の英語経済の授業を受けたときのことです。試験では、James Burnhamのことを書いた論文を和訳せよと出題されました。恥ずかしながら、私はバーナムと読むことすらできずに「バーンハムは……」と訳したのも赤面ものの懐かしい思い出です。それでも、先生はゼミ生には「優」をくれました。今思い返せば、先生の学生に対する「この人物の名前ぐらいは知っているのかな？」という悪戯心を垣間見たような気がします。そんな楽しい、本当にやさしい先生でした。多分91歳のご退職まで、こうした遊び心いっぱいの学生から大人気の先生だったに違いありません。

そろそろ進路を考えなければならなくなった４年生の時です。先生の研究室に入り浸っていた私は、漠然とした憧れで先生に「大学院に行ってみたいと思うのですが？」と尋ねたことが一度だけあります。先生のその時の回答（まさに即答でしたが）は、「あのなぁ三浦君、研究者になるということは自分の研究が必ずや世界を変えるというよ

私の書棚の津守コーナー

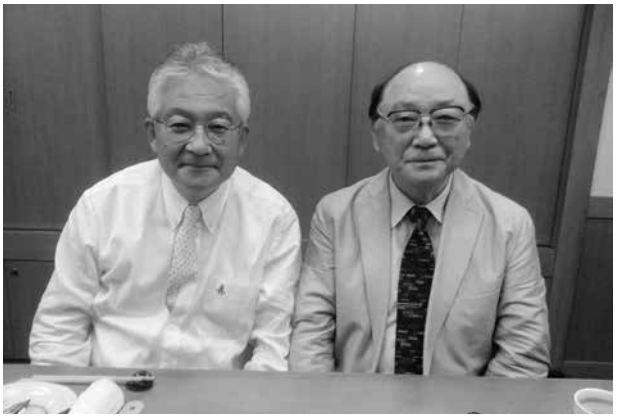
うな気構えがないとあかんよ。」と優しい声でおっしゃいました。「成程、そういうものか。じゃあ私は大学には残れない。」とこちらも即座に大学院生の夢をあきらめたことを今でも鮮明に記憶しております。

先生は、私の中途半端な思いを一瞬で見抜いておられたのですが、そこを柔らかい関西弁で諭していただいたのでした。その言葉で私は大学院への未練もなく（最も大学院を受けるに足る勉強もしていませんでしたが)、地元の銀行に就職しました。

翌年、縁があって結婚し、披露宴に先生に来賓としてお越しいただいてスピーチをお願いいたしました。その時の「英語にベターハーフという言葉がありまして……」と終生妻を立てるようにとの言葉を私は今でも大事にして、自分が披露宴のスピーチを頼まれた時などに、先生のお話しぶりをイメージして使わせていただいております。

先生が神奈川大学から九州情報大学にお移りになり、福岡に戻られてから何度かお会いし、一緒に食事をし、お酒を飲んだこともありますが、何度お会いしても、その若さと切れ味鋭い判断力に裏付けされたお言葉にはいつも脱帽でした。私自身、学生時代の気持ちに戻るほど緊張するのが嬉しく、とてもありがたいひと時でした。

先生が米寿のとき、ＯＢゼミ生が一堂に会してお祝いの会がありましたが、次回は是非「日本最高齢まで教壇に立たれたお祝い」や、「津守先生100歳の誕生祝賀会」をしたいですね。地元の先輩方と相談して、私が幹事として頑張ります。津守ＯＢゼミ生の皆さん、そのときはよろしくお願いいたします。今回このような機会をいただき誠に有り難うございました。九州大学経済学部の卒業生で、そして津守ゼミＯＢ生で本当に良かったと思います。これからの人生も精進してまいります。何せ、津守先生から見れば私はまだまだ若輩者ですから。

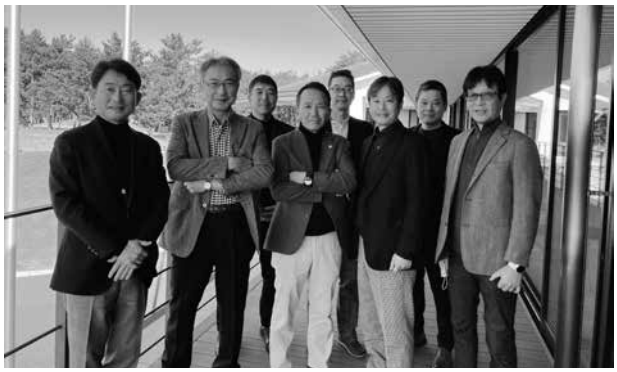


市内の寿司店でほろ酔い加減のツーショット

繋がり広がる同窓の輪

ＥＹ新日本有限責任監査法人
宮本　義三氏
1991(平成3)年卒

12月の晴れ渡る蒼天の下、経済学部卒の古賀ゴルフクラブメンバーのゴルフ会、通称「古賀の会（松原会)」が12月10日に開催されました。メンバーは道永幸典さん（昭和56年卒)、橋本上さん（昭和59年卒)、堀芳郎さん（平成元年卒)、田川真司さん（平成２年卒)、鎌田幸治さん(平成21年QBS卒)、大石聡一郎さん(平成２年卒)、緒方寛治さん（平成４年卒)、宮本。このようなご縁をいただけるのも、九州大学の同窓であるためだと感謝するばかりです。



12月10日古賀ゴルフクラブにて
左より：筆者、橋本さん、堀さん、道永さん、田川さん、緒方さん、大石さん、鎌田さん

私は、平成３年に九州大学経済学部経営学科（津守ゼミ）を卒業いたしました。現在は、EY新日本有限責任監査法人に勤務しており、2022年６月から日本公認会計士協会　北部九州会の会長に就任致しております。

九州大学を卒業した翌年に公認会計士二次試験に合格し、それから30余年監査法人に勤務して、福岡の地で上場会社等の会計監査、これから上場を目指される会社の上場準備支援、コンサルティング業務等に従事してきました。

学生時代は、会計学研究会（以下「会計研」)、テニスサークル「オレンジロード」に所属し、楽しい学生生活を過ごさせていただきました。出身は大牟田の三池高校です。三池高校から経済学部に進学したのは私含めて二人でもう一人は現在凸版印刷で営業本部長をしている木村君です。

大学合格発表後下宿先を探すため、木村君と一緒に六本松の教養部キャンパスを歩いていると、着物

を着た女性に声をかけられ、そのまま連れていかれて気づいたらその女性が営む下宿先にお世話になることに決まっていました。あとでわかったことですが、その女性は、日本舞踊（藤間流）の先生でした。お風呂はなく、トイレは共同といういわゆる間借りというものでしたが、初めての一人暮らしで隣には木村君もいるということで、とても楽しく大学生活をスタートすることができました。学生時代は、サークル、バイト、パチンコ、ドライブ、合コンととても楽しい時間を過ごしました。会計研では、夏は島原合宿でソフトボール大会をしたり、学祭では焼き鳥屋を出店し、看板づくり、ネタの仕込み等をみんなで切り盛りしました。今ではこのことがとてもなつかしく思われます（最近会計研が廃部になったと聞いて寂しい気がします）。テニスサークルでは、車を出し合って九州各地に毎年合宿へ出かけて青春を謳歌していました。

本学のある箱崎に引越しをする大学２年生の頃は、バブル経済の影響もあって箱崎地区も不動産開発がかなり盛んで学生向けのワンルームマンションが続々と立ち並んでいました。そのおかげで、私も新築物件に入居でき、教養部時代とは劇的に住環境が変わりました。

大学３年生になると次第に周りは就職活動の話で盛り上がっていました。私は、就職するか会計士試験を目指すか悩みながら津守ゼミの同期である柴田君、平田君と一緒に会計研の部室で簿記１級のテキストを使って勉強していました。冬場の部室はとても寒く、ストーブを焚いてもまったく温まらないため、自作のビニールハウスもどきを作って寒さをしのいでました。お腹がすくと、みんなで部室棟の２階にある喫茶店によく行ってました。そこの名物である、留学生直伝の骨付手羽元をホロホロになるまで煮込んだチキンカレーがとても美味しかったのを今でも覚えています。

久住山頂にて：前列右端が津守先生、
後列左から2人目が筆者、3人目が大石経済学部長

萩合宿にて：奥右端が筆者

津守ゼミは、毎年山登りに行ったり、萩に合宿に出かけたりしていました。津守先生は、財務会計の議論だけでなく、いろんなお話を先生特有の冗談も交えながらされていました。ある時、津守先生と握手する機会があったのですが、先生の手がとても骨太で大きかったことが鮮明に記憶に残っています。卒論は、「WALL STREET JOUNAL on Accounting」を翻訳し発表することでした。訳も分からず訳していましたが、その後会計士として、会計実務・監査実務に従事している中で、退職給付債務のオンバランス化といった実務が日本にも導入されることになった時に、これは卒論執筆に向けて萩でみんなで苦戦してた内容だと気付きました。

いよいよ大学４年になり、周りの友人が就職先が次々に決まっていく中、私は留学をしてみたいと思ってバイトでためていたお金を全額、専門学校に費やして、公認会計士二次試験講座（その当時福岡で会計士二次試験の講座はビデオ講座しかありませんでした）の１年半コースを申し込み、そこからＷスクールが始まりました。卒業した平成３年に１度目の試験を受けましたが、そこでは通らず、翌年平成４年に合格することができました。受験生活を支えてくれた今は亡き両親並びに彼女（今の奥さま）に心から感謝しています。平成４年に合格後すぐに太田昭和監査法人（現：ＥＹ新日本有限責任監査法人）に就職し、今に至っております。

公認会計士になって随分してから、津守先生を囲む会がありました。その時どのような話の流れでのことか忘れてしまいましたが、「なぁ宮本君、君はまだ挫折を知らんやろ」とおっしゃり、そのあと「挫折は味わったがいいで」とか「きっとどっかで挫折を味わうで」とかおっしゃったことがありました。津守先生、確かにその後挫折をしっかり経験いたしました。先生のおっしゃっていた意味がわかるような気がいたします。

帝国ホテルにて：徳賀先生（右）と

最後に私は、昨年６月より日本公認会計士協会理事及び北部九州会会長に就任しておりますが、就任にあたり副会長を５名選任する必要がありました。任期である３年間、しっかりとチームで運営できる体制にしたく最も信頼できる方々にお願いし了承いただきました。結果として堀さん（経済工学科）、田邊さん（経済学部）、斧田さん（農学部）私含めて正副会長６名のうち４名が九大出身ということになりました。このチームは最強チームだと思っています。また、現在の企業会計審議会の会長であられる徳賀先生、また現九州大学経済学部長の大石先生も津守ゼミの先輩であり、改めて九州大学で生まれた人の繋がり、輪の偉大さ、ありがたさを感じております。

北部九州会会長として今力を入れていますのが、九大生のように優秀で多様な人材に会計士業界に関心を持っていただくための制度説明を含む普及活動、サステナビリティ情報開示等への取り組み、地域のステークホルダーの方々との意見交換です。

よくも悪くも新型コロナウィルス感染症の影響で、職場環境、就学環境というものは劇的に変わってしまったと思います。会計士の仕事の在り方も180度変わり、以前は出社・対面当たり前であったものが、今では出社は自由、リモートは常態化となっています。そのような環境で効率的にこなせるようになったことも確かにたくさんありましたが、emotionalなものの醸成、人間関係・信頼関係の構築といった点では対面でのやり取り、経験が欠かせないと改めて実感しております。

今回寄稿させていただくにあたり、大学時代から今日までの思い出を改めて整理することができました。寄稿の機会をくださった大石経済学部長に心より御礼申し上げます。

鉄オタ特集

北海道の蒸気機関車と殖民軌道・簡易軌道

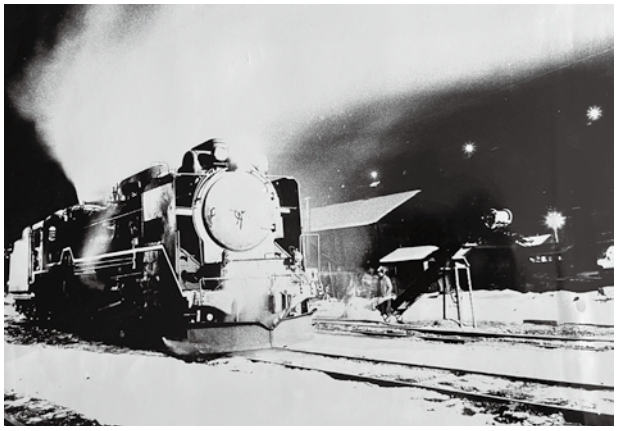
経済学研究院教授
清水　一史氏

皆様、お元気でしょうか？コロナもようやく収束しつつあり、昨年は福岡同窓会にも東京同窓会にも対面で参加できました。今年の卒業式と祝賀会も対面で開催です。ゼミOGの稲波（旧姓深瀬）さんも、東京同窓会理事として来ます。『同窓会報』では、また「鉄オタ特集」に寄稿できて大変嬉しいです。更に北海道の鉄道について書いてみます。

私の鉄道趣味の始めは、北海道の蒸気機関車の撮影です。蒸気機関車は今でも好きで、見に行ったりします（九州の動態保存SLの58654号も）。北海道で生まれ育ったので、蒸気列車終焉の際も色々見に行きました。国鉄の函館本線、室蘭本線、石北本線、幌内線、歌志内線、炭鉱私鉄の美唄鉄道、夕張鉄道などです。

1975年の日本の最後の国鉄蒸気列車の際にも撮影に出かけました。12月14日には、室蘭本線で最後の蒸気旅客列車が室蘭と岩見沢の間を走り、私も途中の追分から岩見沢まで乗りました（超満員でした！）。12月24日夕張線の夕張から追分への最終蒸気貨物列車の際にも、夕張駅と追分駅で撮影していました。

北大の学部時代からは、前回も書いた北海道の小さな軌道（殖民軌道・簡易軌道）を調べています。時々


夕張駅で最後の貨物列車牽引前の蒸気機関車（D51 241）。

論稿を書いたり講演したりもします。殖民軌道・簡易軌道は、北海道だけに存在した特殊な国有の軌道です。1910（明治43）年度に始まる北海道第一期拓殖計画末期の1924（大正13）年に道東の中標津―厚床間（根室線）に初めて建設され、1972（昭和47）年に最後の浜中町営軌道が廃止されるまで、地域の貴重な交通手段となっていました。中でもその代表と言える「鶴居村営軌道」をずっと調べてきています。

鶴居村営軌道（殖民軌道雪裡・幌呂線）は、最初の根室線に続いて1928（昭和３）年に建設された最も歴史ある殖民軌道の一つで、鶴居村と釧路（釧路駅の隣の国鉄新富士駅）を結んでいました。当初は馬力線（馬が牽引！）で、その後、ディーゼル機関車や自走客車（簡易軌道に特有のディーゼルカー）も使われました。この地域の最重要な交通手段として40年間多くの人々に利用され、1968（昭和43）年に役目を終えて全面廃止となりました。鶴居村は、広大な釧路湿原をはさんで釧路市の北に位置します。村名の由来となったタンチョウ鶴の生息地としても有名です。現在は酪農で豊かな村です。第２次大戦前から他の軌道には見られないバス改造ガソリンカーが走ったり、特有の自走客車が走ったりしました。

この軌道の探求の原点は、北大の研究会の後輩達と行った２回の４泊５日の現地調査で、一緒に調査した後輩達とは、今でも当時の思い出で盛り上がります（時々仲間が集まり合宿したりします）。その時の調査の際にお会いした元軌道運転担当の小野正彦氏とは、31年振りに再会して以来、毎年お会いしてインタビューを重ねています。

この時の調査を基に後輩の飯塚君と『鉄道ピクトリアル』に論稿を書き、その後、鉄道史学会全国大会の共通論題で報告したり、学会誌『鉄道史学』に論文を書いたりしています。釧路市立博物館の企画展「釧路･根室の簡易軌道」などにも協力しています。

３年前の『同窓会報』に記した以降の新たな動向も書いておきたいと思います。鶴居村や別海町では、以下に述べるように、より大規模な簡易軌道保存構想が進められています。貴重な北海道の歴史的遺産の保存や地域経済活性化のためにも、是非進めて頂きたいと思います。このことを会議で話したりすることもあります。

鶴居村では、現在のふるさと情報館「みなくる」に加えて、新たに鶴居村営軌道の資料保存や車両の展示を行う「簡易軌道パーク」の構想が進められています。北海道遺産にも関係する大きな動きです。

鶴居村ふるさと情報館「みなくる」に３両揃った鶴居村営軌道の車両

貨車の前で旧鶴居村営軌道運転担当の小野氏と釧路の同好の笹氏と

自走客車の動態化も検討されています。

2022年９月には鶴居に行って、丁度、これまで釧路で修復・保管されていた村営軌道の貨車（釧路製作所製、独特の大柄な貨車）が鶴居村に搬入されるところを見て来ました。ふるさと情報館「みなくる」の前庭に、自走客車とディーゼル機関車（両方とも札幌の泰和車輛製）に貨車が加わり、大変貴重な北海道のメーカー製の車両が３両揃って展示されました。今後、更に簡易軌道パークとして整備されることを大いに期待しています。小野さんとも２日間一緒で、更にインタビューさせて頂きました。

鶴居村に行ってみることもお勧めです。丹頂鶴のメッカで、秋や冬には多くのカメラマンも来ています。夏の釧路湿原も大変魅力的です。美人の湯で有名な温泉（３軒目のホテルが昨年オープンしました）や、特産のチーズ（「Nikkeiプラス１」の「コクを楽しむ国産チーズ」で２位！）もあります。また鶴居産のワインも美味しいです。是非一度、訪問してみて下さい。鶴居村は釧路からバスや車で１時間ほどで、釧路空港からも近いです。

別海町では、かつて交通の要所であった奥行臼（おくゆきうす）地区に旧奥行臼駅逓所（人馬の継立てや宿泊の施設）、旧国鉄の奥行臼駅（旧標津線）、旧別海村営軌道の奥行臼停留所という３つの時代の異なる貴重な交通遺産がまとまって残っており、それ

らを「奥行臼史跡公園」として大規模に整備する計画を進めています。簡易軌道についても、自走客車（釧路製作所製）、ディーゼル機関車（加藤製作所製）、牛乳運搬貨車（釧路製作所製）の３両とともに、軌道の転車台や車庫、修理工場などがまとまって残っていて、それぞれ整備される予定です。自走客車を動かす動態化も検討されています。大いに期待したいです。

2022年には別海町にも行って来ました。別海町は、根室に近い北海道東端のとても広い町です。有名なトドワラもあります。D51形などの蒸気機関車や気動車を展示している別海鉄道公園もあります。別海町では人口の約７倍の牛が飼育されていて、牛乳生産日本一です。牛乳も大変美味しいです。北海シマエビやジャンボホタテも大変美味しいです（地酒とも！）。

遠軽町の丸瀬布森林公園いこいの森は、お客として乗る事もできる動態保存で有名です（旭川から網走方向へ特急や車で２時間くらいです）。こちらの訪問も大変お勧めです（キャンプ場や温泉もあります）。森林鉄道の蒸気機関車「雨宮21号」とともに、かつて鶴居村営軌道で使われていた小さなディーゼル機関車も、動態で保存されています（札幌の運輸工業製。「鶴居DL」と呼んでいます）。この機関車の保存については、北大の大学院の頃に後輩の今井君と復元保存の要望書を出した事があります。昨年12月には、雨宮21号の保存に関わってきた方々による本（『森林鉄道蒸気機関車雨宮21号』北海道新聞社）も刊行されました。鶴居DLについても書いて頂いています。ご関心ある方はどうぞご覧下さい。

簡易軌道に関して最近では、2020年12月の『鉄道史学』の論稿とともに、雑誌『鉄道ピクトリアル』2021年８月号の「北海道の鉄道特集」に「北海道の殖民軌道・簡易軌道研究覚書」を書かせて頂きました。計12ページで結構色々書いています。もしもご関心ある方がいらっしゃれば、どうぞご連絡下さい（shimizu@econ.kyushu-u.ac.jp）。コピーやファイルをお送りします。

奥行臼の別海村営軌道の自走客車と機関車

九大経済の同窓生の皆様とも、鉄道話でも交歓したいです（世界経済やASEAN、RCEPの話も、もちろんできます）。是非また同窓会でお会いいたしましょう。

【参考（2020年以降）】夢里塾・森林鉄道蒸気機関車雨宮21号編集員会編『森林鉄道蒸気機関車雨宮21号』北海道新聞社、2022年／清水一史「北海道の殖民軌道・簡易軌道」鉄道史学会『鉄道史学』38号、2020年／清水一史「北海道の殖民軌道・簡易軌道研究覚書」『鉄道ピクトリアル』71巻８号、2021年。

鉄道技師だった曾祖父の『回顧録』

経済学研究院准教授
鷲崎　俊太郎氏

私と鉄道との関係は、物心がついた３～４歳まで遡るかもしれません。父方の祖母は、フィールドワークという名の旅行好きで、祖母の旧友と「ちょっとおでかけ」する際には、小田急ロマンスカー（当時の主流はNSE 3100形）に乗って箱根湯本まで連れて行ってくれました。また、母方の実家は京王井の頭線の沿線にあったのですが、その母方の祖母と駅前の商店街までお買い物をする際、踏切で待たされてしまうと、「次に来る電車（3000系）の前面は７色のうち何色なのかクイズ」をして、色を当てるのが、日常茶飯事となっていました。小学校は私立に通ったのですが、それを決める際にも、個人的には、中央線の特急「あずさ」（183系）を毎日見たくて、国立市にある小学校への入学を決めたほどでした。（その小学校は、実のところ、西武鉄道と深い縁を持っていたのですが…。笑）

それでは、どうして鉄道が好きになったのか――そう尋ねられても、あるいは自問しても、後天的な理由を考えるのが面倒くさいので、「先天性の遺伝だ」と回答することにしています。なぜなら、曾祖父が鉄道技師だったからです。

曾祖父・鷲崎文三（ぶんぞう）は1876（明治９）年、現在の佐賀市兵庫町に生まれました。（ですので、鷲崎家のルーツは東京でなく、九州・佐賀にあります。）

旧制佐賀中学、そして東京工業学校の機械科を1896（明治29）年に卒業後、新卒で就職したのが筑豊鉄道（現在のJR筑豊本線と平成筑豊鉄道伊田線）でした。しかし、筑豊鉄道が九州鉄道（主として現在のJR鹿児島本線・長崎本線）に吸収合併されると、居心地が悪くなったのか、２年を待たずして北海道へ渡航し、以後18年10か月もの間、道内の鉄道技師として勤務しました。40歳代になると本州・九州内の運輸業務に従事しましたが、技術屋としてはあまり管理部門に向いていなかったのかもしれません。1924（大正13）年に、健康上の理由で50歳を待たずに依願退職しました。その後、佐賀へ帰郷しましたが、50歳代半ばに一家揃って上京し、以後、鷲崎家は東京府内の武蔵野・三鷹で生活するようになります。曾祖父は、曾孫の私が生まれる７年前に89歳の天寿を全うしたので、私は曾祖父に直接会っていません。しかし、私が鉄道好きで、しかもいま九州で好きな仕事をしていられるのは、もしかすると曾祖父のお導きがあったからではないかと、振り返ることもあります。

そんな曾祖父は非常に筆まめで、『回顧録』というものを残しています。これは、太平洋戦争が始まり、疎開した長男宅の山口市で終戦を迎えたものの、直ちに帰京するどころか、近県へ旅行すらもできず、あまりにもすることがない日々が続いたため、徒然なるままに自分の半生を回顧しながら執筆したものでした。この『回顧録』は、祖父の代、父の代を経て、現在、私に受け継がれています。せっかくなので、その全文を九州大学経済学会『経済学研究』第77巻第４号（2011年１月）に、「資料　鷲崎文三『回顧録』：1876-1930」として復刻しておきましたので、ご興味ある方はぜひご覧下さい（https://hdl.handle.net/2324/19157）。

そのなかで、興味深いエピソードを２つ紹介しましょう。１つは、新卒の就職について、なぜ鉄道業界を選んだのか、が書かれています。鉄道が好きだから就職したのかと思ったら、「産業革命」の著しい日清戦争直後、綿紡績業界だと「入社後一年位ヒハ女工同様一昼夜交代ヲセネバナランノデ」、健康面で長時間労働を躊躇せざるをえず、また当時は新興だったビール業界に対しては、「若シ此会社ニ入社後失敗デモスレバ困ルダロウ」と、ベンチャー精神のひとかけらも持ち合わせていませんでした。それで、郷里に近い筑豊鉄道会社への入社を決めたと書いてあると、明治時代の就職活動においても、九州男児は地元の安定した企業を好んでいたのかもしれません。

小樽の廃線跡（撮影者：浦川邦夫教授）

もう１つのエピソードは、北海道鉄道部が鉄道作業局（のちの鉄道院）へ吸収されたことに伴い、文三自身も、官吏である高等官から雇員へ降格を被った時の話です。この不遇な時期に、『鉄道時報』という鉄道専門雑誌で、懸賞論文の募集がありました。この審査員の中には、のちの汽車製造社長で「弾丸列車計画」を推進した島安次郎がいました。文三は、屈辱感をバネに替え、根っからの筆まめと技師の経験を活かして、「本邦鉄道に適用すべき完全なる列車連結装置」という題目の論文を投稿したところ、これが一等に当選して、賞金50円を獲得してしまったのです。ところが、文三は素直でないために、応募者名に本名を明かさず、「BBB」というペンネームで投稿したものですから、鉄道作業局内では、この「BBB」なる者は何処の誰だと、大騒ぎになったそうです。このペンネームは、Bが３つで本名の「文三」を意味していたのですが、当時の鉄材の最上等品（Best Best Best）の符号にも由来していたそうです。この当選のおかげで、釧路機関事務所長として技師に復活できたのがよほど嬉しかったのでしょう、遺品の大半は処分されましたが、懸賞論文の当選通知書だけは、この『回顧録』に挟まっていました。

いま、『回顧録』は、私の研究室に保管してあります。いわば、鷲崎家唯一の古文書、歴史資料です。『回顧録』の最後には、家族・子孫へ向けた８つの「注意事項」が記されているのですが、その１つには、「禍ヲ転ジテ福トナスコト」と書かれています。

鉄道と歌

経済学研究院講師
平野　琢氏

この度は、伝統ある同窓会報にて大好きな鉄道について前回に続きまして執筆させて

いただき、同窓会、そして編集部の皆さんには感謝に絶えません。さて、今回も既に先輩の皆様が見識深い「鉄学」について原稿を執筆しているので、本稿では「鉄道と歌」という少し変化球的なテーマで話題を書いていきたいと思います。

「鉄道」と「歌」と聞くと、なんだかかけ離れたイメージを持つ方もいらっしゃると思いますが、歌謡曲から童謡、俳句、短歌など様々な歌に鉄道は登場します。例えば、明治を代表する文学者で多くの俳句を発表した正岡子規の作品の中にも「鉄道のうねりくねりや　夏木立」や「限りなく　鉄道長き夏野哉」など鉄道が登場する作品が多くあります。また正岡子規に限らず多くの俳人の俳句にも鉄道が登場する句があります。

また、童謡を見ても鉄道が登場する歌は多くあります。鉄道と童謡と聞いた場合に、多くの人は「線路は続くよどこまでも」を真っ先に思いつくかと思います。この歌は19世紀のアメリカの歌が原曲（原曲も鉄道労働者の歌）で、日本で歌詞が充てられたものが発表されたのは1980年代と新しいのですが、音楽の教科書にも採用された時期があります。また古くは、1912年に初出された尋常小学校唱歌の中にも「汽車」という歌があり、かなり昔から鉄道が歌のモチーフとなっていたことが伺えます。

歌謡曲を見てみても鉄道がモチーフとなっているものは多くあります。例えば「なごり雪」や「ホームにて」のように特定の駅名や鉄道に触れていないものの、歌のモチーフとして鉄道が登場するものや、「あずさ２号」や「ブルートレイン」のように、実際の駅名や運用列車名が歌詞や曲名に登場するものなど実に様々です。更に近年では、駅における業務放送や車掌さんのアナウンスそのものをオマージュして作成される楽曲（例えば、スーパーベルズさんの「MOTER MAN」）もあり、「鉄道と歌」の世界の発展はとどまるところを知りません。

鉄道の楽しみ方としては、実際に乗車する楽しみ方（乗り鉄）、模型を集める楽しみ方（模型鉄）などが有名ですが、鉄道好きの視点から歌詞を分析してみたり、歌のモチーフとなった舞台を実際に尋ねてみたりするなど、歌を起点として鉄道を楽しむことも中々に趣があると私は感じます（個人的に私はこれを“歌鉄”と呼んでいます）。

さて、前置きが長くなってしまいましたが、これまでの自身の「歌鉄」の活動で、面白いと感じた小ネタを一つ紹介したいと思います。鉄道がモチーフとなった歌謡曲の代表的なものに「なごり雪」があると思います。この歌は発表年こそ1974年と昔の曲ですが、幅広い世代に愛されている歌の一つではないでしょうか。「汽車を待つ君の横で僕は時計を気にしてる」で始まるこの歌では、具体的な列車名こそ出てこないものの、春に別離する若い２人の気持ちや人の成長が、駅時計やホーム、汽車の動きなどにより生き生きと描写されています。この歌を聴きながら、「この歌はどこが舞台だろう？」と考えた読者の方も多いかと思います。

曲名や歌詞だけで推測すると、まず曲名である「なごり雪」という言葉は、旧暦２月15日（新暦で３月の中旬当たり）の涅槃会（ねはんえ）に降る雪（涅槃雪：ねはんゆき）、あるいはそれ以降に降雪する「別れ雪」や「名残の雪」を指すものと考えられます。このことから、この曲は少なくとも３月中旬以降にも雪が降る地域をモチーフに歌が作られたのではないかと考えられます。また、歌詞では「東京で見る雪はこれが最後ね」とあるので、これらを総合すると、東京で３月中旬以降も積雪が見込まれ、且つ寝台列車など長大編成の列車が停車する大きな駅、例えば（東京駅や上野駅）などが舞台なのではと推測してしまいます。

しかし、より深くこの歌の誕生の歴史を調べてみると、「なごり雪」のモチーフとなった駅は、東京でも雪国でもないことがわかります。楽曲の発表以降の音楽番組や情報誌を調べてみると、「なごり雪」のモチーフとなった駅は、なんと九州は大分県の津久見駅であるとされています。津久見は「なごり雪」を作詞・作曲をした伊勢正三さんの故郷であり、彼の津久見駅における高校時代の経験がこの曲のモチーフになったとされています。殆ど積雪のない大分県の海岸地帯の駅がモチーフとなって「なごり雪」ができたという話を聞くと、アーティストの想像力にひたすら感服するばかりですが、実際に津久見駅を訪れてみると（雪こそ全くありませんが）「なごり雪」を彷彿とする情景に出会えます。ホームから上り方面を望むと、そこにはすぐトンネルがあり、その先が遠い世界であることを感じさせる情景になっています。また、なだらかなカーブに沿って伸びる全長約260メートルのホームは、かつて寝台列車など長大編成の列車が、この津久見駅に停車していた時代の名残であり、まさにこの駅が遠くに旅立つ人が往来する場であったことを表しています。更に、現在の津久見駅には「なごり雪」の歌詞を刻んだ碑もありますし、同駅の到着メロディーに「なごり雪」が使用されているなど、津久見駅と曲の深

いつながりを感じることができます。

「なごり雪」以外にも歌詞を分析してみたり、実際にモチーフとなった場所を訪ねてみたりすると意外な発見に出会える「鉄道をモチーフとした歌」は、まだまだ数多くあります。鉄道が好きな人はもちろん、音楽が好きな人にも「歌鉄」はおすすめです。

鉄道による環島：台湾

経済学研究院准教授
中本　龍市氏

環島（かんとう）という言葉をご存じであろうか。台湾では、島を一周するという意味である。今回は、初めての方が、鉄道で環島に挑戦される場合を想定してお話ししたい。台湾は、しばしば九州とほとんど同じ大きさであるとされる。九州を鉄道で一周するときのことを想像すれば、台湾の環島もイメージしやすい。急げば、24時間以内に鉄道で一周できるのである。これならば、短期滞在でも、環島してみようかという気になるのではないだろうか。

具体的な旅程を見ていきたい。まず、台北から出発して、南の大都市・高雄まで一気に南下しよう。「台北駅」は、九州で言えば「博多駅」のような位置にあり、南北をつなぐ「台湾高鉄」が利用できる。24時間以内という条件付きで環島するには、この高速鉄道を使って「左營駅」（高雄）まで南下するのが良い。終着駅までは最速列車で約90分で到着する。時間距離で見れば、だいたい博多駅から鹿児島中央駅までに相当する。

高速鉄道では、切符購入や入場、乗車、出場も含めて一連の流れが非常にシステム化されていて、海外の鉄道旅に特有の苦労や煩わしさのようなものを感じられないかもしれない。さらに、この路線では、日本の新幹線をベースにした車体（700T型）が走っていて、車両からも異国情緒を感じられないかもしれない（このあたりは、吉田修一さんの『路』のドラマをご覧になった方も多いであろう）。

しかし、ここから先に、まだまだ台湾の鉄道の魅力が残されているのである。高速鉄道を後にして、台湾鉄路（鉄道）へ乗り換えてみよう（台湾鉄路の駅は、新左營駅という駅名になっている）。こちらは、日本の在来線のような位置づけである。高速鉄道と比較すればシステム化されておらず、切符購入から出場まで乗務員さんや駅員さんとの交流が残されている。切符の買い方やどの列車に乗れば良いか分からなくても心配ない。遠慮無く、筆談で駅員さんに聞くと良い。とても親切に教えてくれる。時には、日本語で教えてくれることもあり、驚かされる。

現地の人達の協力を得ながら何とか、台湾鉄路の高雄駅に着くと、次は東海岸へ、そして北上して台北に戻らなければならない。時間制限付きなので、東海岸は、主要駅だけに途中下車するとしよう。それらは、九州で言えば、だいたい宮崎と大分のような位置にある２駅である（厳密に言えば違うが、イメージとしてお話しすることをお許しいただきたい）。前者は台東駅、後者は花蓮駅である。問題は、東海岸では、列車によって所要時間が大きく異なり、かつ、列車の本数が少ないことである。

時間を節約するためには、自強号などの特急列車で、高雄駅から台東駅まで一気に進むと良いだろう。列車によるが、少なくとも２時間以上はかかる。この区間は東海岸へ出るまでトンネルも多い。だがそれが終わると見所がある。それは、車窓から豪快に広がる太平洋である。北上する列車ならば、右側に座ると存分に車窓が楽しめる。太平洋の車窓を楽しんでいるうちに、台東駅へ到着する。

ここまでの旅程で、乗り鉄目的だけでも十分に楽しめるが、さらに地域色豊かな駅弁（便當）もあることを加えておきたい。台湾の駅弁は、地方ごとに現地の特産品を取り入れており人気がある。例えば、東部では、お米が特産品でとても美味しい。毎度驚かされるのが弁当の熱さである。台湾の駅弁は、どの駅でも、そして、車内販売ですら、熱々である。急ぎの環島の途中であっても、熱々のお弁当をいただけるのは、ありがたい。台東駅では新駅舎が完成してから、ずいぶんと店舗が増えたそうだ。さっそく、駅で弁当を調達して、さらに北上しよう。

台東駅から花蓮駅は、同じく列車によるが２時間以上はかかると考えておいた方が安全である。できれば、特急列車でどんどんと北上したい。この区間では、海岸から離れてしまう一方で、東部の急峻な山地や南国ムードのあふれる植生が車窓から楽しめる。台北や高雄といった大都市部にない台湾の魅力を伝えてくれる風景が待っている。

水田やバナナ畑といった、のどかな車窓が続いてきたところで、花蓮駅が近づいてくると、少し都会の様子になってくる。せっかくなので花蓮駅でも、

少しだけ途中下車してみよう。花蓮の名物は、芋や豆を使った餅である。駅舎の正面から出てまっすぐ歩くと、多数の餅屋が軒を並べているのに気づく。台北などに支店がないため、ここでしか買えない餅屋もある。試食できるので、気に入った餅を買えば、良いお土産になるであろう。

お土産を調達したら、台北を目指して再び北上していく。ここまで来れば台北へ帰るのも安心できる距離であるが、とはいえ、花蓮駅から台北駅まで特急列車で少なくとも２時間はかかる。小腹が空いたら、花蓮で少し早めの夕食をとっても良いが、夕方の特急列車は混雑することがあるので注意が必要である。指定席が取れない場合に、２時間を立ったまま台北まで乗り通すのは厳しいものがある。

まとめると、高速鉄道とその後の台湾鉄路での時間も合わせて、12時間くらいあれば何とか急いで環島が可能である（もちろん途中下車と後続列車の接続によっては、もっと時間がかかる）。これなら、初めての方でも、１日だけで環島が実現可能ではないだろうか？

とはいえ、台湾の東海岸には、このほかにもたくさんの見所がある。特にお勧めしたいのは温泉である。九州と同じように、台湾は温泉が多い。特に東海岸は、アクセスしにくいため秘境のような温泉地がある（感染症対策などで臨時休業中のことがあるため事前に調べていただきたい）。どこかの温泉地で一泊されると、環島の旅が思い出深いものになるだろう。

紅葉温泉　秘湯中の秘湯

ここまで書いてきてようやく気づいたことがある。今の時代は、ChatGPTに聞けばもっと良い提案をしてくれるのかもしれない。最後になって心配が出てきたが、皆さんが環島に挑戦される際の一助になれば幸いである。

31歳にてJR・私鉄の完乗達成

伊藤　勇人氏
2015（平成27）年卒

こんにちは。2015年卒の伊藤勇人と申します。私は2022年６月18日、沖縄都市モノレールてだこ浦西駅にて、日本国内の鉄道全線の完乗（只見線の一部区間は代行バス利用）を達成いたしました。今回は、この完乗について振り返りたいと思います。

完乗という行為を最初に意識したのは、小学校の時地元の市の図書館で、『ひとりっ子テッちゃんの鉄道大冒険―２万キロ!!全国ひとり旅』という、当時20歳くらいの方が小中学生くらいの年齢の頃を振り返って書いた鉄道旅行紀の本からです。その次に、中学時代に放映されていた、『NHKの列島縦断 鉄道12000キロの旅』および『翌年の列島縦断 鉄道乗りつくしの旅 JR20000km全線走破』という番組です。俳優の関口知宏さんが最長片道切符とその翌年にその切符のルートから外れた路線を旅した番組です。中学２年の冬休みには、初めて福岡東京間を一人で青春18きっぷで往復しました。高校では、模型部で鉄道を研究し、時には青春18きっぷで視察旅行に行きまして、少しずつ乗車距離が増えていきました。

大学生になりますと、自由とバイト代が手に入りましたので、長期休みで遠征するようになり、完乗へのペースもあがっていきました。青春18きっぷ、LCC、夜行バスをフルに使い、卒業までにJR、私鉄とも半分程度完乗していました。そして社会人になりますと、東京に移住したことから今までアクセスし辛かった東北北海道へのアクセスが楽になり、またお給料もいただけるようになって特急や飛行機をかなり使えるようになってさらに乗りつぶしがはかどりました。私鉄もJRも残り５％くらいとなったところで2020年コロナ騒動になってしまったのですが、それも乗り越え、2021年夏、宇野線宇野駅でJRを完乗しました。それから翌年2022年４月に阿佐海岸鉄道のDMV転換区間を乗車、６月沖縄の沖縄都市モノレール、てだこ浦西駅まで全線乗ったことで達成しました。

記憶に残っているところを文字数の都合、３件紹介していきます。

・音威子府（おといねっぷ）駅そば常盤軒

音威子府駅は宗谷本線の途中にある小さな村にある駅です。この駅の駅そば常盤軒にて出されるそばはソバの実を皮ごとひく独自の製法で仕上げる「黒いそば」です。一部では日本一の駅そばとも呼ばれる名店です。ここの存在を知ったのは、最初に紹介したNHKの最長片道切符の旅で関口知宏さんが食べていたのを見たからでした。

2016年の夏に一度、車で友人と旅行した時に音威子府駅に寄った際は売り切れており、食べることができませんでした。そしてそのリベンジで2020年２月、ついに食することができました。前日に稚内に宗谷本線で入りまして、当日は朝の稚内発の特急サロベツで音威子府に９時前に到着。オープンの10時半まで駅周辺で適当に時間をつぶし、いよいよ開店。店主のおじいさんが一人、そばをゆでてつゆを注いでくれました。見た目から独特な濃厚な味の麺と関東の黒いつゆ、氷点下の街を歩いた後なのでとても体に沁みました。

その後、コロナの影響で休業になったまま、店主の方が亡くなりそのまま閉店となりました。また、音威子府の黒いそば自体も製麺所が廃業したため、もう食べることができないものになりました。本当に、ギリギリ間に合ったというタイミングでした。

・羽越本線から見る夕方の透明光線

2012年３月、私は大学１年終了後の春休み。人生初の東北でした。前日夜大阪から当月中に廃止の決まっている急行きたぐにで新潟に到着し、新潟からきらきらうえつ号で酒田、そこから普通列車で秋田方面へと向かいました。酒田から秋田までの羽越本線区間で夕方を迎えていたのですが、ちょうど日本海に沿って走っているところで、海の方角の雲の切れ間から夕陽が差し込むところが見えまして、遠くまで来たことへの実感と合わせて日本の広さと日本海の美しさに感動しました。

・達成の瞬間

2022年６月18日土曜日。私の年齢は30歳９か月、土曜日朝那覇空港に降り立ちました。最後に残った沖縄都市モノレールに乗るためです。沖縄は小学生のとき以来でこの時はまだ工事中でした。フリー切符を買い、まずはポケモンラッピングのモノレールで途中駅旭橋まで向かいました。ここには那覇バスターミナルと戦前にあった沖縄県営鉄道の那覇駅の跡地があり、バスを数台撮影した後、駅跡の遺跡も見ました。私はバスも廃線跡も好きなので、一度降りてみたいところでした。少し楽しんでから、かりゆし水族館のラッピングのモノレールに乗り、かつての終点首里を越え、てだこ浦西駅に到着しました。万歳をしたいところですが、一人で万歳をやるとさすがに不審者なので、一人心の中で万歳をしました。本当はオリオンビールで祝杯といいたいところでしたが、この後車を運転する予定だったため、てだこ浦西駅から徒歩10分程度の食堂に行き、沖縄そばの定食を昼食に食べて祝杯の代わりとしました。この後赤嶺駅まで戻り、レンタカーを借りて翌日まで沖縄を満喫しました。

まだ、振り返りたい思い出はたくさんありますが、文字数もありこの辺で。ところで、2023年２月現在、バス代行で達成扱いとした只見線の一部区間は復旧したのですがまだ乗れていません。昨年９月開業の西九州新幹線には乗ったのですが、今年３月にはまた福岡市地下鉄七隈線の延伸と相模鉄道新横浜線が開業しますので乗りに行く必要があります。そうやって少しずつ伸びていく鉄路をずっと乗っていくと考えると、一生のテーマとして私は日本国内鉄道全線完乗を位置づけていくことになるのかなと思います。

リレー随想

とある「不良」九大生の顛末記

㈲すずらん・㈲すずらんフーズ
チーフ オブ スタッフ
平田　郁人氏
1983（昭和58）年卒

私は1983年に経済工学科を卒業し、農林中央金庫に就職した。その後1987年～ 89年には、農林水産省畜産局への出向等も経験した。2013年には㈱農林中金総合研究所に転籍し、2022年６月に62歳で退職した。

幸い、福岡市にある家業の学校食堂等を営む中堅の（有）すずらんは営業しており、実家の90歳になる母も健在である。このため、家内には東京で池袋の自宅を管理してもらい、私は７月から母と同居し家業を手伝っている。

さて、たまに聞く話に「勉強は読み書きソロバンだけでよい、それ以外は社会に出ても役には立たない」というのがある。大学での勉強は教養を身に着けることで、様々な経験や事象を立体的にし、人生をより豊かにするためのものかなとも思っていた。ところが、今振り返ってみると、大学４年間は特に勉学に励んだわけではなかったが、講義や教授の指導は、その後の私の職業人としての論理思考やスキルを高め、職業ひいては人生に多大な影響をもたらした。以下二つの具体例を、偶然理系関係になるが述べる。

経済工学科の入試が理系科目になったのは、我々の世代で二年目、共通一次試験正式採用後初となる。高校で理系を一旦選択したけれど、後に社会科学の面白さに目覚めた私には絶好の目標となった。しかし入学後、教養部での数学の講座には難儀した。経済学部に進み、数理統計学を受講したが「不可」だったので３回受講したが単位は取得できなかった。数理統計にかかわる数学の概念を理解できないことが原因なのだが、結局その壁を越えられないまま終わった。

しかし、社会人になってから農水省出向の際、中型コンピュータで最小二乗法を使い政策価格を算出する際に、統計の入力値と出力値との関係を眺めていたら、突然統計数学の概念が理解できた。まるで初めて自転車に乗れた子供のように、理解できた。数理統計学を不可ながら繰り返し学んだおかげだと思っている。以後、統計的手法を用い、ＪＡ貯金の変動要因の分析や畜産物の相場予測等を行ってきた。

もう一例は、当時国立大学の理系入試の学生には、情報処理と称しＢＡＳＩＣ言語でコンピュータを操作し、簡単なプログムミングをする必修講座があった。実態は、万年カレンダーや月面着陸ゲームを作る程度のものであったが、これに熱中し授業に空きができると、電算センターに行って、プログラムの数値等を変えたりして遊んでいた。初めてコンピュータに触れ、その面白さに惹かれるとともに、巨大な可能性を感じていた。

卒業後、初任地の熊本支店では、パソコンによるＯＡ化を独自に推進していた。学生時代に情報処理講座を受講させられたおかげで、入庫二年目に過ぎない私がＯＡリーダーとなることができた。経済工学科の同窓の中には、私と同様の経験をして、システム関係でキャリアアップした人も結構いるのではないかと想像する。農水省出向時でもパソコンが使えるとの理由から、多くの仕事をさせてもらい、結果的に様々なデータや情報に触れさせてもらうことができた。

人生とは不思議なもので、苦手なものから逃げても、逃げ切れない。これも大学での出来事を端緒に経験した。私は小学生から作文がずっと苦手で、いつも点数は低かった。そんな私が在学中に耳にしたのは、故中楯興先生のゼミは卒論が不要で、ゼミに入るのも先着順との話だった。徹夜で並び、めでたく中楯ゼミ生となり、卒論を書かないでよくなった。

就職に際し、中楯先生に相談したところ、ご子息も入庫された農林中央金庫を勧められた。金融業務なので作文とはほぼ縁遠いところで業務できると期待もした。ところが、農林中金総合研究所に転籍し、論文や記事を書いたり、関連雑誌社からの出稿依頼を受ける羽目に陥った。卒論から逃れようとして、結局、人一倍の文章を書くことになってしまった。私が書く文章は、ゼミで身に着けた長期間のデータを論理思考により分析することで、一定の傾向や関係を見定める手法をとるケースが多く、鬼籍に入られた中楯先生には今でも感謝している。

高校までの勉強は、大学で学ぶための基礎的要素が比較的多い。一方、大学での学びは結構役立つ実学が多い。多変量解析による予測モデル、産業連関（生産誘発）分析等は、中央官庁、地方自治体、お

よび、企業で今なお多用され、恐らく今ではＡＩとも連携して効果を増していることだろう。

最後に、調査・研究していた数年前、国の研究機関の方は「財政事情の悪化から、基礎研究に携わる人員が削られ、さらに短期に成果が出る研究に絞られている」と危機感をもっておられた。「今後は大学・都道府県の研究機関・関連企業と連携を強化していく」とも言っていた。九大経済学部にも、地理的特性等を活かし、海外も含めた様々な研究機関とも連携のうえ一層の活躍を期待している。

リレー随想

パーソナル トランスフォーメーション（PX）の場としてのQBS

佐賀大学・副学長/理事/医学部教授
寺本　憲功氏
2022（令和4）年QBS修了

▶はじめに

令和４年（2022年）３月に経済学府 産業マネジメント専攻専門職学位課程（九州大学 ビジネス・スクール：QBS）を修了した、寺本 憲功と申します。この度はQBS 18期を代表し、伝統ある経済学部同窓会の会報へ寄稿させて頂く機会を賜り、心より感謝申し上げます。

「ビジネス・スクール」は経営、ビジネスおよびマネジメントの基本的知識やスキルを学ぶ経営大学院の総称であり、課程終了後、経営修士／MBA（Master of Business Administration）の学位が授与されます。我が国において本制度は平成15年（2003年）４月にスタートし、同年、QBSは西日本で初の国立大学ビジネス・スクールとして創設されました。従って本年はQBS創立20周年という記念すべき節目の歳に当り、この間、QBSは820余名の優れた“人財”を各界へ輩出してきたことは大変、素晴らしく、栄誉なことで心から御慶び申し上げます。

QBSには２年以上の実務経験と旺盛な学習意欲を持つ社会人が国内外から集い、多様性に富んだ同期と共に切磋琢磨し、最先端の実践的知をキャッチアップしつつ、継続的かつ自律的なアップデートを行う、自らが成長する場、すなわち、パーソナルトランスフォーメーション（PX）の場です。

▶第一章　そうだ！ QBSに行こう！！

令和２年（2020年）４月、時はまさに新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振い、社会的不安が日々、増していた頃、我々はQBSへ入学し、私も九大へ久しぶりに戻ってきた。私は学部生として進学課程の２年間（六本松）と専門課程の４年間（馬出）の計６年間（体育会ヨット部在籍の４年間を含む）、大学院生（医学系研究科・博士課程）として４年間、その後、イギリス留学（５年間）による不在期間を挟み、さらに医学部教員（助手・専任講師）として13年間、計23年間、九大に在籍（職）した。その後、縁あって佐賀大学医学部へ教授として移動し、昼夜を舎かず、基礎医学研究に没頭していた。しかしそのような充実した平穏な日々が長く続く訳がない。平成29年（2017年）夏、学長に呼び出され、同年10月から大学経営陣の一人として理事・副学長に就任することが決まった。“54歳の夏”、まさに晴天の霹靂であった。

さて理事・副学長に就いた後、２年間は何とかこれまでのアカデミック キャリアで培い、個人的経験に基づいた才覚で学術研究、社会連携、知的財産や国際交流等に関する事業構想の企画立案、統括、モニタリングおよびマネジメント業務を行った。しかし何ら体系立った学問で裏付けされた思考でも無く、もし経営学に習熟すれば、今以上に明瞭な判断軸で有用なマネジメント能力を発揮し、さらに次々とイノベーションを創り出すことが出来るのではないか！？と思い、急ぎビジネス・スクールで経営学を学んだ方が早道では？と考え、「そうだ！ QBSに行こう！！」、自ずと答えが出た。

▶第二章　コロナ禍での学生生活

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、自治体から繰り返し発出された緊急事態宣言や外出自粛による感染防止の徹底、さらにウイルス新株出現による感染波のため、全国の教育機関は史上初、「遠隔授業」を一斉導入した。

１年次（2020年度）の講義はほぼ全てZoomによる「遠隔授業」だった。QBSの高い危機管理体制のもと、講義は何ら支障無く開講され、この場を借りてQBSのご尽力に対し、御礼申し上げたい。当初、教員も院生もZoomに不慣れだったが、さすがZ世代の同期は凄い勢いでZoomの使い方をマスターし、世代間格差を痛感した（ヤバイ！）。一方、緊急事態措置が解除された短い合間を縫うように対面での学生交流も行われ、日頃、モニター越しでしか会っていない２次元の同期と３次元のリアル世界で会

うことは変にドギマギし、違和感すら覚えた。２年次（2021年度）に入るとゼミ演習は可能な限り、「対面授業」が推奨され、一方、講義は「ハイブリッド形式」が中心となった。ZoomのBreak-out Sessionでの小グループ単位で議論を深め、自らの考えを構築していく、まさに“教育領域でのニューノーマルの台頭”となった。

同期との懇親会

また日々の講義で聴く内容は何もかもが新鮮だった。世の中にはこんなに凄い学問（リーダーシップ論・コーポレートガバナンス論・ベンチャー論 等）があるのかと感動を覚えた。また自分で学費を工面して進学した（身銭による自分への投資！）のも人生初であり、自ずと講義にも身が入った。私も長年、大学教員として医学生を相手に講義をしてきたが、QBSの講義を受講して「目から鱗！」と思わせる、破壊的な衝撃を受けた。いわゆる、「反転学習」が既に確立していた！事前にMoodle上に掲載された講義資料や動画等をダウンロードし、予習した後、実際の講義に臨む。講義は教員による簡潔な解説の後、小グループによるディスカッションが中心となり、自分の考え方を構築する。講義終了後、復習としてMoodleを介し、自分の考えをレポートに纏め、担任教員へ電子提出する。この理想的な「反転学習」のお陰で知識の定着が一気に進んだ。また科目の中にはたった１回の講義を聴いただけで授業料全額の“モト”が取れた！と思わせる素晴らしい、“唸るような”講義が幾つもあった。各人のタイミングで学び直し、仕事で求められる能力を磨き、自らの能力をアップロードすることを経験出来たのは非常に大きな収穫だった。

▶第三章　ゼミとプロジェクト論文

あくまでも個人的な見解だが、QBSの最大の強みはおそらく、プロジェクト演習（少人数制によるゼミ形式での指導：ゼミ）にある。約１年のゼミで本当に鍛えられる。私は幸運にもQBSへ着任間もない、小城 武彦 教授の指導を受ける機会に恵まれた。小城ゼミではコメントを発する際、①自らを社外取締役と想定し、見解を述べること（全体像を鳥瞰せよ）、②常に多数与党的な見地から建設的な内容に限ること（誹謗中傷はNG）が徹底された。少人数制ゆえ、小城教授のみならず、同期からの鋭い貴重な意見を参考に自分自身の考え方を修正し、より良いモノへと変遷を遂げていく過程を幾度も経験した。また小城教授による一対一のコーチングも圧巻であった。克服すべき課題に真正面から対峙し、小城教授の胸を借りつつ、自力で問題解決の糸口を見つける、まさに実戦さながらの鍛錬が繰り返され、真剣勝負のゼミでの研究成果を纏め、文章化し、プロジェクト論文が完成した。

また私は母校、英国・オックスフォード大学で指導教授との一対一の教育、チュートリアル（個別指導）教育も受けた経験もある。実際の思考のパターンはそれほど数多くはなく、パターン群を一つ一つ学ぶところから始まった。異なる様に見える各論的な考察をそう多くはない思考パターンへどのように落とし込むかがこそ、考える技術である。こう述べると至極、簡単なプロセスに捉えがちだが、これが意外と難しく、相当な経験が必要となる。しかしこの技術は、一旦、会得すると決して忘れない。漠然と「面白そうだ」だけではNGで、行うことに十分な意義があること、そして自分の力でやり抜けるかどうか。この辺の“見切り”が非常に難しく、実は自分自身で一つ一つ経験を積むしかない。また指導教授も教え子に経験を積ませるしかないと常に考えており、これら一連の行為を丸ごと、指導教授は「教育」として行おうとする。無論、指導教授が私のために費やす労力やその時間たるや、まさに想像を絶する位、膨大である。それだけ「一対一で“ヒトを創る”濃密な教育」を約900年も続けて行ってきている点こそが、オックスフォード大学の真の底力であろう。THE世界大学ランキングには様々な議論の余地があるのは十分、弁えているが、オックスフォード大学が常に世界大学ランキングでトップなのは決して‘伊達’ではなく、逆に、日本の大学が下位に甘んじている現状も止むを得ない。

▶まとめ

バブル崩壊直後の1990年代から続く「日本経済の

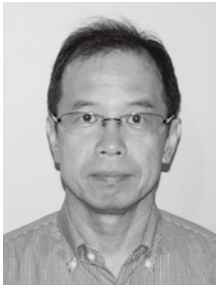
失われた30年」。その間、我が国の経済成長は長期に渡り停滞し、また労働生産性も低迷を続け、依然として景気の回復テンポは緩やかな状態に留まっている。また近年、我が国は“課題先進国”と呼ばれ、エネルギー問題（ゼロ・エミッション）、インフラ危機（設備の老朽化と地球温暖化に伴う超災害による負荷）、少子高齢化 等の多くの克服すべき現代の課題が他国に先駆け、一気に顕在化し始めている。このような厳しい環境下、経営者は豊かな創造力で新しい付加価値を生み出し、常に“勝ち戦”をしなければならない。一方でピンチはチャンスである！経営者は自主・自立し、主体性を持ち、まさに予測不能の現代社会を生き抜いていくため、自分自身が時勢の動き（時代の潮流）に合わせて常に変化していかなくてはならない。「トランスフォーメーション」という言葉は、本来、「幼虫」から「サナギ」となり、そして羽化して「蝶」へと『変態』していく様を表す。すなわち、『これまでとは全く別の姿に生まれ変わること』を意味し、まさにQBSはパーソナル トランスフォーメーション（PX：自己変革）を成し遂げる場ではないか。

我が国において「人生100年時代」と言われるようになって久しく、国民の健康寿命も年々、確実に延びている。私自身、大学経営者として「この長寿国日本の未来を良くするにはどうしたらよいのだろうか？」と常に静かに自問自答し、QBSで学んだ知識や築いたネットワークを如何に社会実装するか、その術をあれこれ憶う日々である。

2021年度学位記授与式－ゼミ同期生と小城教授を囲んで－

人物往来 ～退任

退任にあたって



経済学研究院教授
石田　修氏
専門分野：貿易投資分析

九州大学経済学研究院を退任するにあたり大学生活を振り返ってみたいと考えます。

家庭の事情で関東の大学への進学を諦め、九州大学を受験・入学することとなりました。学生生活の強烈な思い出は、寮生活です。田島寮、松原寮で過ごし、他学部そして他大学の寮生とも交友関係を結ぶことができ、有意義な時間を持つことができたのは今も財産です。田島寮では、寮長を経験させてもらいました。どこかの部屋で酒を飲みつつ、大いに語り明かす毎日でした。

六本松では個性豊かな友に囲まれていました。彼らとは経済学の古典の自主研究会をしたり、あるいは麻雀では鴨にされたりと、刺激的な毎日を送っていました。転機は、世界経済論の木下先生のゼミに所属したことです。現代資本主義や世界経済に関する色々な書物を取り上げ、午後の時間を通じて議論をし、木下先生のコメントに触発される場でした。この場を共有できたことが大学院進学を決心する最大のきっかけでした。

大学院では木下先生をはじめ、故・徳永先生、上級生の鳴瀬さん、同学年の星野君、河内さん、他のゼミからの参加者から多く触発されました。さらに、田中先生、故・西田先生、皆村先生、中村先生、川本先生とは研究会などでお会いするたびにお世話になりました。

博士課程修了直後は経済学部助手として採用され、その一か月後鹿児島大学法文学部の助教授として赴任、1992年に九州大学経済学部の助教授として採用され、今年退職するにいたりました。多彩な学部ゼミ生や院生を指導でき非常に有意義な教員生活でした。また、イギリスのケンブリッジ大学へ在外研究をさせてもらい、学部やカレッジでの刺激的会話、教員や学生の国際性など驚かされされました。

帰国後、総長指定の多くの役職、発足したJTW

での英語授業や留学生指導など学部外業務、そして、ビジネススクール設立での対立、経済学原論や学説史の授業科目が経済学科から消えたことなど、個人的にかなりの負担やショックがあり、長く体調を壊していました。健康を回復するために登山やジムに通うなどして少しずつ研究活動ができるようになりましたが、教育に時間を割くことを優先したのは否めません。

研究を振り返ってみると、第１に産業の空洞化や経済のサービス化、そして競争力関係の構造変化に関する研究、第２に価格データと数量データを利用することから垂直的産業内貿易の拡大を明確にした実証分析、第３に多国籍企業活動の変化による生産システムの変容とグローバル・バリューチェーンの形成に関する研究、第４にネットワーク分析を用いたバリューチェーンのデータ分析の試み、最後にデジタル集約企業の活動によるデジタル空間の拡張が世界経済に及ぼす影響という５つの研究領域を開拓できたのではないかと考えます。個別のテーマの根底には、構造変化の多面的な視点から、現代世界経済を安定している「平衡形（均衡）としてみるのではなく、システムの循環のなかに非平衡の要因が現れ構造が変容している」ことを分析する目的があります。このような研究をおこなえたのは九州大学経済学の職場環境に身をおくことができた賜物だと考えます。

それでは、九大在職中にお世話になった全ての方に感謝を申し上げて、退任の挨拶とさせていただきます。長い間ありがとうございました。

九大での教育･研究活動を振り返って

経済学研究院准教授
内田　大輔氏
専門分野：経営学

2023年３月末日をもって、九州大学大学院経済学研究院を退任することとなりました。2016年４月の着任以降、７年間と短い期間ではありましたが、教育・研究両面において、得難い経験をすることができました。

教育面では、これまでに49名の学生をゼミで指導し、卒業生として送り出すことができました。ゼミでは、「何が原因で何が起こるか」（因果関係）を説明する力を養うことを目標に、企業行動に関する実証研究を行なってきました。実証研究を行うためには、因果関係をデータに基づいて検証するために不可欠な研究手法、企業行動の因果関係を論理的に理解するために必須な経営理論を体系的に習得する必要があるため、日々の予習・復習は学生にとって負荷の大きいものであったにもかかわらず、49名すべての学生がゼミ論文を無事に執筆し終えることができことを嬉しく思います。こうしたゼミでの学びが、今後、生産者（書き手）として社会調査・研究を行う際に活きるだけでなく、消費者（読み手）として社会調査・研究を「批判的」に読む際にも活かされることがあれば、この上ない喜びです。

研究面では、同僚である経済学研究院・教授の浦川邦夫先生（社会保障論専門）、経済学府で博士号を取得し現在は長崎県立大学地域創造学部・講師である虞尤楠先生（労働経済学専門）と学際的な共同研究を行い、国内の労働経済学領域において高い評価を得ている査読付き専門学術雑誌『日本労働研究雑誌』に掲載されるなど一定の成果をあげることができました。本共同研究では、労働経済学領域において実務的にも学術的にも今最も関心が高いテーマの一つである男性による育児休業の取得について企業を分析単位とした計量分析を実施し、その先行要因（どのような要因が育休休業の取得に影響を与えているか）と業績への影響（育休休業の取得は企業の業績にどのような影響を与えているのか）を検証しました（詳しくは、内田大輔・浦川邦夫・虞尤楠(2023)「日本企業における男性の育児休業の普及：先行要因の解明と業績への影響の検証」『日本労働研究雑誌』751を参照)。日本企業における男性の育児休業という一つの現象に対して、異なる視座もつ共同研究者と議論を重ね、それを一編の論文という形にまとめることができ、研究を進めていく中で多くの刺激を受けると同時に多くの学びを得ることができました。

こうした教育・研究活動を何とかやって来られたのも、同僚教員や事務の方々からの多面的な支援のおかげにほかなりません。末筆ながら、これらの方々に感謝しつつ、九州大学経済学部・大学院経済学府及び同窓会員の皆様の益々の発展を心より祈念しております。

経済学部同窓会 創立50周年記念寄付金

寄付者様ご芳名（五十音順・敬称略）

ご寄付頂いた方々のお名前と卒年を匿名希望の方を除き掲載させていただきます。ご厚意の程、心より感謝申し上げます。

名　前	卒年
青柳　成美	S34
安陪　義宏	S42
荒木　一彦	S36
飯野　博幸	H５
池田　達彦	S55
石川　敬一	S34
板崎　智哉	R４
市村　昭三	旧教員
稲田　公範	S47
井上　剛実	S43
井上　俊二	S32
井上　純一	S51
岩瀬　靖継	S42
岩田　健治	現教員
上野　隆義	S27
牛木　　元	３年在学
梅田　則之	S32
梅本　健介	S53
大石　桂一	現教員
大坪　　稔	現教員
大山　　威	S56
岡本　　尚	S34
笠原　靖之	S57
河内　紘一	S39
川原　　晃	S54
菊池修一郎	S48
北野　淳史	H12
城戸　守夫	H22
久家　　淳	H18
久保　一正	S38
隈　正之輔	S33

名　前	卒年
河野　哲夫	旧教員
古賀　嘉人	S45
小久保　理	H３
小田部善太朗	H12
近藤　裕行	S45
櫻井　文夫	S52
酒見　寿代	H18
貞刈　厚仁	S52
佐藤　進一	S43
佐藤　秀夫	S63
佐藤　和夫	S32
塩田　　孝	S44
柴田　雅夫	S63
進　　研一	S63
新　　清	S39
杉　　哲男	S43
須藤　則行	S50
須藤　精治	S44
澄川　雅則	S36
隅田　和行	S36
高藤　英夫	S62
田中　米蔵	S37
種村　茂明	S36
筑紫陽八郎	S37
長　正次郎	S44
綱脇　俊夫	S30
津野　雅秀	S40
鶴丸　克雄	S39
富井　順三	S50
富澤　義敬	S30
冨田　和典	S55

名　前	卒年
中尾　伸雄	S47
中島　俊介	S28
中島　　誠	H29
中野　光男	S50
中原　弘二	S42
中村　英美	S37
西川　明宏	H31
西川　剛史	H５
貫　　正義	S43
野田　淳嗣	S37
則行　義孝	S33
橋本　純夫	S47
橋本　　寛	S47
原田　和郎	S52
原田　帯刀	H３
樋口　健二	S45
久野　豊美	S45
日吉　清治	S33
平井　琢二	S63
平田　一男	S30
廣田　憲治	S50
福澤　広行	R１
福山　茂之	S28新
藤井　美男	旧教員
藤原香太郎	S47
古野　孝志	S55
星隈　寛人	S33
前泊　朝日	R４

名　前	卒年
増田　　稔	S35
松枝　繁生	S49
松下　俊平	H30
松田　剛次	H７
松田　明倫	H30
松原　武志	R４
松本　和宏	H３
丸山　昌弘	H３
水島多美也	H29
宮地　直敏	S57
宮原　正雄	S40
美山　英治	S40
宮本　義三	H３
村井　利彰	S52
盛　　拓海	H８
森　恍次郎	S45
安田　　茂	S48
矢田　俊文	旧教員
矢永(宮田)麻里子	H21
山田　　勉	S35
山根　敏明	S39
山本　高照	S43
幸松　正人	S44
吉井　勝敏	S48
吉永　　央	S58
吉本　広志	S60
吉元　利行	S53
渡邊　公人	S22

寄付金額 2,277,000円　令和５年３月末現在
（目標額　1,000万円　令和８年３月末まで）

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（３年間分4,500円）になっております。
終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

①終身会費	一括	45,000円
②　〃	３分割	15,000円×３回（1.5年間で納入完了）
③　〃	６分割	7,500円×６回（３年間で納入完了）
④普通会費	３年間分	4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了）

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。
◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に３回又は６回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。
◎会費納入や住所変更等のデータは、令和５年３月31日現在で集計しました。

住所など身辺の事情に変更が生じましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。

九州大学経済学部同窓会事務局　（開室：平日の月・火・木・金　10時～17時）
〒819－0395　福岡市西区元岡744　九州大学経済学部内
TEL 092-802-5561／FAX 092-802-5560／E-mail：dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
経済学部同窓会ホームページ　http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4